烏帽子会會報

2011年春号 Vol.50



新装成ったメディカルホール

- ■特集 "名誉教授からのメッセージ" 12p
- ■第30回鳥帽子会総会のご案内 5 p

福岡大学医学部同窓会

目 次

・総会案内 第 30 回鳥帽子会総会のご案内 ・公開講座	
命の大切さを考えるパート 3: あなたの手で救える命がある! 朔 啓二郎 ・当直医パニックマニュアル発行のご報告 北島 研 ・教授退任挨拶 退任のご挨拶 岡崎正敏 ・特集"名誉教授からのメッセージ" 近況のご報告 白日高歩1 福岡大学医学部と現在の私 河田 薄1 何でも診てくれる暖かい先生 有吉朝美1 近況報告 廣木忠行1 後期高齢者の仲間入り 西丸雄也1 "武士道"(日本人の魂)啓蒙活動の日々 田中彰1 近況報告 坂本公孝1 近況報告 坂本公孝1	
・当直医パニックマニュアル発行のご報告 北島 研 ・教授退任挨拶 過崎 正 敏 退任のご挨拶 同 崎 正 敏 ・特集 "名誉教授からのメッセージ" 白日 高 歩 1 近況のご報告 白田 薄 1 何でも診てくれる暖かい先生 有 吉 朝 美 1 近況報告 廣 木 忠 行 1 後期高齢者の仲間入り 西 丸 雄 也 1 "武士道"(日本人の魂) 啓蒙活動の日々 田 中 彰 1 近況報告 坂 本 公 孝 1 近況報告 大 島 健 司 1	
退任のご挨拶 岡崎正敏 <td by="" by<="" color="" rowspan="2" td="" the="" to=""></td>	
近況のご報告 白日高歩1 福岡大学医学部と現在の私 河田 溥1 何でも診てくれる暖かい先生 有吉朝美1 近況報告 廣木忠行1 後期高齢者の仲間入り 西丸雄也1 "武士道"(日本人の魂) 啓蒙活動の日々 田中彰1 近況報告 坂本公孝1 近況報告 大島健司1	
福岡大学医学部と現在の私 河田 薄1 何でも診てくれる暖かい先生 有吉朝美1 近況報告 廣木忠行1 後期高齢者の仲間入り 西丸雄也1 "武士道"(日本人の魂) 啓蒙活動の日々 田中彰1 近況報告 坂本公孝1 近況報告 大島健司1	
何でも診てくれる暖かい先生	
後期高齢者の仲間入り 西丸雄也1 "武士道"(日本人の魂) 啓蒙活動の日々 田中彰1 近況報告 坂本公孝1 近況報告 大島健司1	
"武士道" (日本人の魂) 啓蒙活動の日々 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
近況報告 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
近	
近況報告 松 﨑 昭 夫 1	
暇人の日常生活 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 小 田 禎 一 1	
近 況 ······ 朝 長 正 道 1 知行合一 ····· 今 永 一 成 1	
知行合一 ······ 今 永 一 成 1 近 況 ····· 八 尾 恒 良 1	
近況報告 ・・・・・・・ 満 留 昭 久 2	
近 況 有 馬 純 孝 2 近況ご報告と、新診療棟の内覧会に参加して	
近況ご報告と、新診療棟の内覧会に参加して ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 池 田 靖 洋 2 初心は忘れ得ない ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 曽 田 豊 二 2	
・ 同窓会交歓 第1回卒業生の会(なっぱ会)発足について ・・・・・・・・・・・・ 野 﨑 藤 子 2	
・会員寄稿	
初心忘るべからず・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
「ピラティス」、そして、在校生に一言 ······· 武 田 淳 也 2 寄 稿 ····· 重 森 裕 2	
・学生対策報告	
白衣贈呈式 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 平 川 豊 文 2	
・新入生答辞	
入学の辞 ・・・・・・・・ 市 岡 正 敏 2 ・キャンパス便り	
・イヤンハス使り	
平成 22 年度 鳥帽子会賞受賞者名簿 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	
西医体を終えて ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 粟 田 聖 也 3	
西医体を終えて ····· 粟 田 聖 也 3 みんなで勝ち取った西医体優勝 ····· 伊 藤 香 里 3	
西医体を終えて ······ 粟 田 聖 也 3 みんなで勝ち取った西医体優勝 ····· 伊 藤 香 里 3 ・計 報	
西医体を終えて ····· 粟 田 聖 也 3 みんなで勝ち取った西医体優勝 ····· 伊 藤 香 里 3	
西医体を終えて	

会長挨拶

西洋への一考

高 木 忠 博 (1回生 脳神経外科クリニック髙木 院長) 烏帽子会 会長



我々医学部を卒業し た人間は、殆どが医師 になります。中学、高 校の同級生は夫々に 色々な職業世界へ別 れて行きます。医学 部は、卒業の同級生が 全く同じ職業に就くと言 う大変特殊な学部で

す。ですから我々医学部卒業生は、大学と言う教育 機関が作り出した「製品」そのものと言えます。卒業 と同時の選択肢が極めて限られた人間製品と言えま す。そしてその人間製品は、卒業大学を否応無く一 生背負って人生を歩み始めますから、大学と卒業生 が非常に密接に関係している学部と言えます。

大学の評価は、即座に自分達の評価に変わります し、卒業生の評価は大学の評価へ変わります。です から互いに大変大きな「義務」を背負う事になります。 この義務感を感じる意識の高さが、その互いのレベル を決定する要因と思います。一方だけの意識だけが 高くても駄目ですから相互に高水準を維持しなけれ ばなりません。その為には、高水準な個人の意識の 集積が有って初めて成立すると思いますので、義務 感が個人に強く問われる学部です。

今迄我福大医学部は創立35年間で3,326人の卒 業生を送り出しましたが実質の国試未合格者は、現 在9人のみです。3,317人は社会で医師として活動 しています。この中で数人が、スキャンダルを起こし ましたが社会的に福岡大学医学部卒業の医師は評 価が悪いと言う話は聞きません。従って人間製品と しては、良質な人材を作り出している大学と患者さん から評価を貰っていると考えて良いと思います。 「我々が、福大の製品なのだ。」と誇りを持って仕事を して行って良いと思います。

「病む人間を治す仕事」が医師の仕事と思います。 科学的知識の裏付けと科学的根拠を元に病気治療を して行く学問体系を、西洋人は、medicinと言う呼び 名で発明しました。それとは対照的に東洋には「医は 仁術」と言う解釈の治療と言うより精神論的な考え方 が有りましたが、これは医と言う概念への有り様を漠然 と述べているだけで具体的な客観性のある学問体系 ではありません。

日本への西洋医学導入時に「科学」への解釈の違 いは大きかったと思います。最初に西洋医学を学習 した明治時代の先人達は、「医は仁術」と言う概念で 医学を始めたのではないかと思いますが、最初に日 本に西洋医学を教えに来たドイツ人医師ベルツが、 東京医学校を去る最終講義で、「今迄教えた学生で 一番優秀な学生であった。」と賞賛した後に1つ日本 を去るに当り非常に残念な事が1つだけあると最終講 義の中で話しています。

それは、我々西洋人のこの医学と言う「科学」への 根本的な思考思想を学生に伝達出来なかった事が 非常に残念である、として講義を終わっています。こ れは当然の帰結と思います。明治時代の全ての学 生は江戸時代の若者で「医は仁術」と刷り込まれた人 間達です。その人間に医学と言う西洋の「科学」を教 えたのです。「科学」と言う概念を東洋人は全く知りま せんでした。

西洋の科学は、基礎からキチンと学習して行けば 「誰でも理解できる知識」として系統的に「教育」まで 出来る学問体系です。ある一定基準の学習能力を 持った人間であれば、「誰でも!」習得が出来る様にな りその様な人間が沢山増えた方が社会にとって大変 有利であると西洋人は考える人間達です。学問を整 然と纏めて本にして人に教える「教育」と言う所まで内 容を煮詰めて文化を創っている所が西洋の凄い所だ と思います。情緒的に流される事無くリアリティーを 持って現象を捉えて行く事は科学する上で非常に重 要な感性と感じます。

西洋人は、真理(veritas)と言う言葉が大変好きな 人種の様です。真理を探求する手段として西洋人

が、「科学する」という思考方法を編み出して色々な 自然界の真理を解き明かして行ったのが人類発達の 歴史ではないでしょうか。又、univercityと言う教育 機関の構想も、西洋人が考え出した舶来の産物で す。

我々は、この「科学する。」と言う文化を今迄 100 年 掛かって学習して来ましたが、もう一度その西洋人の 思想を十分に理解する必要があるのではないでしょう か。何故なら今の時代はその考えが主流だからで す。その思想に東洋の懐の深い思想を噛み合わせる と完璧な学問が生まれるのではないか?と凡人は考 えてしまうのです。

利己的でなく公正 (fair) を一番に考える西洋の考え方に近い文化を持つ人種は、日本人ではないでしょうか。西洋は、嫌らしくも羨ましい感じがする所の様に小生は感じます。

西洋人が好きな言葉に objective view =客観的と言う言葉がありますが、この英語の意味に含まれる意味は、大変含蓄のある言葉の様に思います。 objective と言う英語を oxford 辞典で調べると、大変に長々と説明してありますから御一覧下さい。 それだけ彼等のこの言葉への拘りは我々よりも大変強いのではないかと感じます。 その説明文章中の言葉には、

belonging (所持品、財産、性質、才能) non-ego (非自我) と言う言葉を使って説明してあります。この言葉を使う事への感性はアジアには無い感覚の様に思います。もう一度日本人は、西洋の文化を噛み砕いて理解する必要が有るのではないでしょうか。

どの様な文化をも「客観的」に理解できる人間が、 先導者にならなければ人類の進化は無いと信じている人間達が地球上には居ると小生には思えるのです。 それから、彼等は頻繁に「高貴なる義務」と言いますが、これは「客観的」である為には、絶対必要であると経験的に知っているから彼等は強調しているのではないかとも思います。又、それを人間が可能にする為に、「自由である」と言う環境が、絶対必要と考えているので自由!自由!と彼等西洋人は叫ぶのではないか?とも思いました。

この様に考えると何か辻褄が合い各々の言葉が繋がって妙に納得してしまいます。我々が日常仕事で使っている学問(医学)は、決して made in Japan ではありません。明治時代に入って来た舶来品の学問ですから、その発想原点(科学する)の意味をもう一度理解するのは大切な事の様に思いました。表層だけの模倣だけでは限界に来ているのではないかと思いました。凡人の愚考でしょうが・・・

当直医パニックマニュアル発行のご報告

福岡大学筑紫病院 循環器内科 北 島 研 (21 回生)

『パニックマニュアル』は、約4年毎に版を重ね、



第5版目として平成21年の夏より編集を開始し、平成22年11月に同窓会報秋号とともに会員の先生にお届けいたしました。

ご執筆頂いた 37名の先生方に この場をお借りし て心より御礼申し 上げます。今回の 改版にあたり考慮したポイントは、企画編集は福岡大学医学部同窓会であり、同窓会先輩医師から後輩への指導書という基本的なコンセプトは変えずに、これまでの非売品から、『当直医パニックマニュアル』として、海馬書房出版社(http://www.kaibashobo.co.jp/)を通じ、一般書店での販売を開始したという点です。

本書は「症候」を目次にして、「鑑別診断」、「必要な検査」、「処置」という一連の流れが、簡単に、かつ 正確に理解できるような構成にしております。

次回第6版発行に際しても、構成内容やデザインを含め、会員の先生方からの幅広いご意見を取り入れて行きたいと思っています。

第30回鳥帽子会総会のご案内とお誘い

烏帽子会会員の皆様におかれましては、ますます ご健勝のことと存じます。毎年行われる烏帽子会総 会(医学部同窓会総会)も回を重ね、今年は第三十 回という節目を迎えました。節目の訪れは新しい時 代の訪れでもあります。今年は、節目の年・新しい時 代にふさわしく、総会と講演会を、今年1月に開院し た福岡大学病院新診療棟内の"福大メディカルホール"で、懇親会は"ヘリオスホール(60周年記念館 3F)"で行いたいと思います。また、講演会には、縁 あって、俳優の菅原文太氏をお招きすることになりました。いままで烏帽子会総会に参加されなかった方や、少し大学と縁遠くなられた方々も、この機会にぜ ひ新しい時代を迎える母校をご覧になってください。

この第30回鳥帽子会総会の当番学年は14回生が務めさせていただきます。ご参加いただくすべての同窓生が有意義な時間を過ごせるように努力して参る所存です。よろしくご指導・ご協力ください。

「第30回烏帽子会総会実行委員会」 池田耕一、小川正浩、久保田正樹、城島 宏、松本直通

第30回烏帽子会総会 開催要領

会 場:福岡大学メディカルホール

福岡市城南区七隈 7-45-1 福岡大学病院新診療棟

開催日時:平成23年7月9日

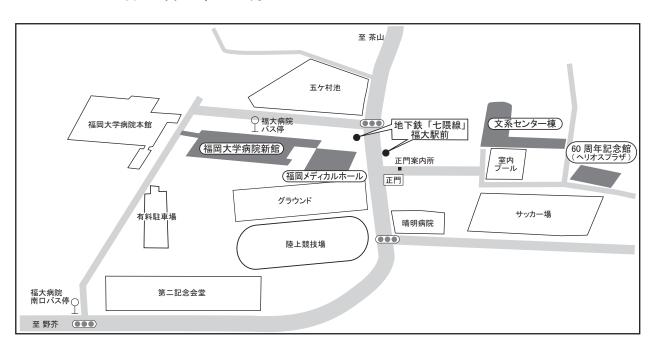
総 会:福大メディカルホール 17:00~17:50講 演 会:福大メディカルホール 18:00~18:50

講 師:菅原文太氏

懇 親 会:60 周年記念館(ヘリオスプラザ)3F ヘリオスホール

19:10~20:30

会 費:5,000円



ご出席のご返事を、巻頭綴り込みの葉書で6月20日までにお送り下さい。

公開講座

福岡大学病院新診療棟開院記念公開講座 370 名の参加ありがとうございます!!

「命の大切さを考える パート 3: あなたの手で救える命がある!」

福岡大学病院 ハートセンター教授 朔 啓二郎 (1回生)

主催:福岡大学エクステンションセンター、福岡大学医学部、福岡大学病院、福岡大学医学部同窓会烏帽子会、 福岡大学病院ハートセンター、NPO 法人臨床応用科学



き、胸骨圧迫、AED (自動体外式除細動器)の教育講座:「いつ、どうやって、どのように胸骨圧迫をするか、AED の使い方」を、ハートセンターの医師による講演を新築の福岡大学病院メディカルホールで行いましたが、約370名の参加があり、大盛況でした。今回の特別ゲストはWindyです。Windyの紹介ですが、同級生4人でスタートしたグループサウンズ、福岡を中心に活動をされています。昭和54年、福岡市天神にあるGSパブ「ウインディー」をオープンされました。グループ結成は今年で41年、ベンチャーズ、ワイルドワンズ等の、1960年から1970年代の歌を中心とした中高年の憩いのライブハウス、店はいつも超満員状態!GSとオールディーズ、中高年の皆さんに愛されているグループで、約1時間、歌と演

奏がありました。Windyのバンドマスター松本さんの病気に関するトークは楽しく最高でした。スタディオパラディソ森山瑛子先生にはコールアンドプッシュ体操をしていただきました。日本全国で22万台設置されているAEDですが、2007年は300回しか使用されていません。もし、3,000回、30,000回使用されたら、もっと救われる命があります。[心臓発作を起こすなら、シアトルで]という標語があるのですが、私たちは「心臓発作を起こすなら、福岡で」を合言葉に、コールアンドプッシュ(ヒトを呼んで、胸骨圧迫をする)の啓発活動を行っています。プッシュには3つの意味があります。胸を押す、AEDのボタンを押す、そして反応がないヒトの胸を押す勇気をプッシュする3つの意味です。

今回の公開講座ですが、福岡大学病院メディカルホールでもコンサートができること、370名超の方を集めた公開講座ができることを実証しました。このエビデンスがほしかったのです。平成23年1月よりオープンしたメディカルホール、メディカルフィットネスセンター(下図)ですが、地域の健康増進に寄与する施設として様々な計画をしています。AEDの学部学生への実践教育、内科学会内科救急・ICLSコースの実践の場、そして心臓リハビリの外来部門として機能しています。



退任のご挨拶

福岡大学医学部総合医学研究センター 岡 崎 正 敏 (特別会員)



私はこの3月に68才になり29年8 ヶ月間お世話学に第一大)医学部を退年を退年を退年を退年を退年を表別を記された。1968年度の外科を関係がある。38年間を対象のは、38年間を対象のは、38年間を対象のは、38年間を対象のは、38年間を対象のは、38年間を対象のは、38年間を対象のは、38年間によりました。

この間の諸先輩、同僚、仲間、患者やその家族と の楽しい出会い、思い出、忘れがたい助言、忠告、 等の一部を感謝の気持ちを込めて御紹介します。

1. 研修医時代

私の医師としての第一歩は九州大学第一外科での研修医生活でした。大学紛争中で、私も国家試験ボイコット、青年医師連合(青医連)参加、スト突入組の1人でした。①研修医制度、医局制度、等の改革に先輩達の多くは、青医連を支持・協力、援助して下さいました。その時の互いを庇い合う仲間意識はまさしく、"One for all、All for one"という実感でした。②"患者及びその家族を自分の親族と思って接しろ"も実践されていました。研修医時代の外科の先輩、仲間とは良好な関係が今も続いており、年2~3回は高齢者ばかり(私が一番若い)で一緒に宴会、旅行などを楽しんでいます。

2. 国立がんセンター病院放射線診断部

1973年、診断学を勉強するために、同部の研修 医となりました。同センターは、別名国立カンファランスセンターと言われ、身分、年令、出身校、 所属、科などの分け隔てなく自由な雰囲気で bloody discussion のできる施設でした。私の師 匠、市川平三郎先生(現、同センター名誉院長) の口癖を一部紹介します。①分ったふりをする な。自分の意見をはっきり述べよ、他人の意見に 安易に妥協するな、納得いくまで討論しろ、②分 かり易い言葉を使え。専門用語ばかり使って国会 議員みたいな発言はよせ、③読影に際しては切除 標本の展開図を描け。等でした。なお、市川先生 は福岡大学医学部・病院創立 30 周年記念会で「日 本医療の世界への発信」と題して特別講演をして 下さいました。④仲間の Data 整理の時は、ほぼ 全員が参加し、フィルム読影から Data 整理まで 行っていました。疑問点を見つけたら必ず発言す る仲間同士の一体となった結団意識の強さが最大 の power を生み出す基だという実感を得ました。 ⑤私は上京1年目にスタッフの先輩の1人が二重 造影教育のため米国に出張され、放射線診断部の 籍が1年間空き、幸運にもスタッフになれました。 その後、籍を新設してもらい、放射線科医として 8年半在籍しました(心技体運:運が人間の一生 を一番左右する気がします)。私の2年目からの 主な仕事は血管造影と乳癌の画像診断でした。 1980年代初めは、国立がんセンターの外科で考 案された安全かつ系統的肝切除術「出血の少ない 術式:エコーガイド下色素剤注入、入れ墨法 (Tattoo by Makuuchi)] が導入されました。全国 から沢山の肝細胞癌 (HCC) 患者さんが同センタ ーに集中した感がありました。連日、HCC の血管 造影に明け暮れました。HCC の診断・治療に血管 造影からどんな情報が必要なのかわからない時代 でしたが、外科医との discussion の中で、肝の区 域診断と門脈内腫瘍塞栓の有無の診断が最も重要 であると結論づけました。当時、これらの事項を 学会で発表してもなかなか分ってもらえなかった のですが"やるぞみておれ口にも出して"をモッ トーに頑張りました。消化器病学会シンポジウム 発表2年後には日本肝癌研究会で「HCC 門脈内腫 瘍塞栓と肝癌の予後」がテーマとして取り上げら れました。なお、これらの事項は現在は当たり前 の HCC 診断学の最重要事項となっています。そ の他、私が頑張ったのは乳癌のX線診断です。も ともと私が同センターに行ったのは二重造影法に よる消化管診断を研修するためでした。二重造影 法で鮮明に描出された早期胃癌 II cの陥凹部の不 整な辺縁像に驚嘆した私でした。ある時、X線読 影室でマンモグラフィの写真を見る機会がありま した。鋸歯状突起を有する乳腺腫瘤像 (spiculated mass) がこれまた鮮明に描出されていました。胃

と乳腺の腫瘤の辺縁の不整像が極めて類似してい ることに気づき、乳癌の X 線診断 (MMG) に興 味を持ちました。市川先生に申し上げましたら、 頑張りたまえとの返事をいただきました。まず、 乳癌の X 線診断の Egan 先生の本を手に入れまし た。その中に乳腺の中に塊としての腫瘤を形成す る癌と乳管の中に癌の壊死産物が石灰化して見つ かる癌があることが分りました。同センターでは 水曜日の午後は消化管と乳腺疾患の切除標本が同 時公開され、放射線技師を含めた皆が標本をスケ ッチし、手で触り、術前画像との比較をしていま した。その後一部の症例の病理像との対比の micro-demo が開催されていました。なお、当時 世界の早期胃癌病理の第一人者であった故佐野量 造先生の micro-demo での口癖を思い出します。 ①肉眼像が読めずして画像や良悪性の鑑別、病変 の拡がり、深達度、病理像等が理解できるわけが ない、②切除標本をスケッチしろ、等です。この 佐野先生に私が「今から乳癌の X 線診断を勉強し たい、切除された乳腺組織の断面図を是非 MMG と同じ軟線撮影 (specimen radiography) させて いただきたい」と申し上げたら快諾されました。 当時日本で見つかっていた早期胃癌を多くの諸外 国の病理学者は癌とは認めない傾向でした。佐野 さんは「早期胃癌を諸外国人に知らしめるために は、我々日本人があまり見たことのない非浸潤性 乳癌(早期乳癌)を沢山見る必要がある。そんな 症例を見つけるよ」と specimen radiography 撮影 に極めて協力的でした。さわって分らない、いわ ゆる触知不能乳癌を一緒に見つけ出すぞ、と意欲 に燃えた技師、病理医、外科医との co-operative group が 出来ました。術 前 画像、specimen radiography、病理のルーペ像、病理標本との対比 が開始されました。その結果、非浸潤性乳癌、触 知不能乳癌が多数発見できました。

私の一番うれしかった思い出を述べます。前述、いわゆる触知不能乳癌発見のいきさつです。 私達は、広い読影室で X 線写真を読影していました。胸部 X 線像読影の達人と言われた鈴木 明先生(後に札幌医科大学内科教授)も夜、読影室に長くいらっしゃる常連で、いつも我々の話もよく聞いて下さる良い兄貴分でした。症例は 1 年前、乳房の違和感で外科に来院、腫瘤は触知しないも、MMG 検査施行。MMG のレポートに手で触っても分らない癌らしい石灰化像が認められるので、①皮膚面に印をつけて MMG を撮り、試験切除する 場所を決定し、② 切除した標本も specimen radiographyを撮って石灰化像のあることを確認し、③同部位の病理学的検査法を施行して下さい、と記載しました。残念ながら、1年目の私のレポートは無視されたままでした。1年後に呼吸器内科の前述鈴木明さんのところにこのターは開院時から全国で初めてともいえる1患者・1カルテ制度を取り入れていました。内科の書いたレポートをカルテの中から発見され「若い "声のでありか」と外科医に文句を言われ、試験切除が施行されました。前述の一連の過程を経て、この症例が私にとって1例目の触知不能、非浸潤癌発見でした。

3. 福岡大学医学部

1981年8月付けで本学放射線医学教室の小野庸教授の基にお世話になることになりました。当時第1内科の八尾恒良先生(現、福岡大学名誉教授)のお誘いでした。まだ、当時普及していなかったHCCの肝動脈化学塞栓術療法(TACE)や動脈性出血の塞栓術による止血、等のInterventional Radiology(IVR)を主な仕事に、朝から晩まで働く日々が続いていました。技師さん、看護師さんを含めたスタッフの方々は、腹部のIVRは初めてやることばかりで戸惑われたことも多かったと思います。ただただ、大声と馬力についてきて下さった若手医師が多かったのも何よりの思い出です。私はここでも"運"があったと思います。

まず第一に当時から脳神経系(放射線科後藤勝 弥先生) 及び心血管系(2内科後救急部:佐々木靖 先生)分野では血管造影手技を用いた血管内治療 (Vascular Interventional Radiology: Vascular IVR) のレベルは日本の最先端でした。両先生を 中心とした血管造影グループが私達の腹部血管造 影グループを暖かく見守り、協力、指導して下さ いました。後藤先生は細いカテーテル (microcatheter; 通常用いるカテーテルの径の半 分位) を血管造影に導入された本邦最初の人で、 同カテーテルを用いた後藤さんの脳血管造影及び IVR は日本一だったと思われます。この microcatheter を腹部血管に使用できたのも彼の 指導によるものでした。佐々木先生は冠動脈の angioplasty の名人であるのみならず、救命センタ ーの臨床現場の中心人物で出血症例を初めとした 救急症例を適格な診断下に多数の患者を我々のも

とに紹介し、更に術後管理も行って下さいました。二番目には私を support してくれる若衆頭みたいな人が必ず何人か私の傍にいて下さったことです。私より 10 才前後若い非常に冷静な判断をされる方々で、他科もしくは他施設からきて下さった方々も含めて2~3年以上私の傍でご協力下さり、私の暴走を抑えて方向性を指導下さった方々です。救急症例の術後管理も皆で寝ずの番をしたのも楽しい思い出の1つです。さらに、彼らは自分の所属科の患者で血管造影や IVR 適応症例を紹介、提示して下さったことです。

私みたいに癖の強い男を公私共に、この30年間監督して下さったのは八尾恒良名誉教授と有馬純孝名誉教授です。感謝の念で頭が上がりません。このご両人と私の3人を福大の3ヤクザ医師(薬剤師)と学生さんが言っていたと言うのも若い頃の思い出の1つです。

福岡大学にきて1年半は、当院での data は学 会、研究会での症例報告発表しか出来ませんでし た。血管造影や IVR を共に施行した若手医師に 一緒に書いたレポートを思い出しながら、多数の 症例報告を共に声高らかに発表しました。2年目 からは若手の先生方による症例報告の論文が出せ るようになりました。3年目には先輩や仲間の紹 介で症例も増え、血管系 IVR 施行件数は本邦 3 指 に入るところまできました。特に救急症例が多 く、夜中も一緒に働いてくれた仲間のみならず、 放射線技師や看護師の迅速な時間外対応があった からと感謝しています。当時は、当院のような三 位一体の医療体制の確立している施設は全国的に 見ても、ほとんど存在しなかったようです。3年 目からは日本語の原著論文が作成可能となりまし た。

ここで、強調したいのは、個々の臨床症例の集積が原著論文の成績の最高の大本となるということです。一例、一例を大切にして、その症例に対する思い入れ、反省をふくめた一連の総括を続ける事により、新しい臨床情報(結果)を生み出す物と信じてます。年をとってくると、個々の症例に対する、これらの思い入れが減って来ている実感があり、寂しい思いがしています。前述ご指導いただいた microcatheter を用いた IVR の症例報告の集合体で 10 編以上の英文の原著論文を 11 年目には作成できました。7 年目になって、やっと国内外の学会のシンポジウムでも発表出来るようになりました。

当時の論文作成に際しても私は運に恵まれてい

ました。"英文論文を書かなければ大学には残れ ないよ"とか"学会などで発表している言葉をそ のまま博多弁英語にすれば良いんだよ"とかのご 忠告を受けていました。さらに、自分でよかった らいつでも、論文の相談には乗りますよと言って 下さった心強い味方が御二人いらっしゃいまし た。そのお二人はご自身の分野では英文論文の 質、数ともに日本では最高と言われていた故板井 悠二(筑波大学放射線科)教授と幕内雅敏元東大 外科教授で、昔一緒に東京で討論、仕事をした先 輩、同僚です。そんなに簡単に英語で書ければ苦 労しませんが、英語論文の表現法を英文雑誌から 真似しながら頑張って論文を書きました。私の論 文の彼らの御高閲では、いつも"discussion の項に results の成績を繰り返す (repeat) ことが多すぎ る。もっと、そこに気をつけて簡潔に書け"、"英 語の表現は native editor が直してくれる。気にす るな"ということでした。簡潔にしたつもりでも、 雑誌の editor からの revise にも "繰り返し"を指 摘され、"簡潔に説明しろ"のコメントが大多数で した。英語に自信がないために、ついつい、くど い文章になっているような気がします。これは今 もあまり変わってない気がします。何かの参考に して下さい。

本学にきて、肝臓癌と IVR の仕事で時間がな く、前述の乳癌の MMG 診断は私は何もできませ んでした。藤光律子先生が頑張ってくださって、 日本の MMG 診断の指導者の1人として全国に名 をはせています。乳癌診療に私が少しは貢献した (?) ことがあります。1986年、私に癌研究会附 属病院(癌研)の乳腺外科、深見敦夫先生(私を 最も可愛がって下さった乳腺外科医)に "癌研乳 腺外科にスタッフとしてこないか"というお誘い がありましたが、IVR にのめりこんでいた私は "行けません"とお答しました。当時、福岡大学第 1外科から第1病理学の大学院生になっていた秋 山太先生(昭和59年卒業)に注目していました。 彼の解剖カンファランス(CPC)での発表、対応、 レポートは分かり易くかつ臨床像(症状、経過、 画像等) に還元できる記載、発言は際立っていた からです。丁度、その時、病理の菊池昌弘教授 (現、福岡大学名誉教授、元、福岡大学副学長)か ら"秋山君という優秀な大学院生は、臨床に戻っ てすぐに役立つ病理学をやらせたい。君、秋山君 に何か役立つテーマを考える"というお話をいた だきました。乳癌は、今から最も増加する疾患 で、今後、その診断から治療は大化けするだろう

と考えていましたので、菊池先生と秋山君に"乳 腺病理を日本で乳癌の診断・治療のメッカの癌研 でやってみたらどうでしょうか?"と癌研乳腺外 科了解のもと提案しました。菊池先生は心の大き な方で、大学院生を他施設で研修、論文作成する ことを了承されました。秋山君も一大決心をし福 岡を離れ東京に行きました。坂元吾偉乳腺病理部 長(初代乳癌学会理事長)のもと努力精進し、坂 元先生の片腕となりました。そこでの論文で博士 号を取ってらっしゃいます。坂元先生引退後、同 病理部長となり、日本乳癌学会の理事として頑張 ってらっしゃいます。彼は、臨床画像と肉眼像を 必ず対比しながら、ルーペ像、病理像を解析する ことが有名で、乳癌の診断や治療を主題とした臨 床系の学会でも中心人物として大忙しの福大卒業 生として世界に誇れる名物先生(乳腺病理の第一 人者)です。乳癌学会の会長になられるのも、そ う遠くないと思います。乳癌関係の私の現在の仕 事は乳癌の MMG 検診を施行する日本全国の施設 の画像向上及び精度管理のための施設画像評価の 委員長をやっています。

福大にきて11年目(1992年)に放射線医学教室の教授となりました。これも強運の1つと考えます。ある先輩から"やってみせ、言って聞かせて、させてみて、褒めてやらねば人は動かじ"という山本五十六の言葉をよくかみしめろ、と言われました。"貴兄は大将になっても戦場の最前線に出て鉄砲を撃ちたがるタイプだ。これは大佐止まりで大将ではない"とも言われました。私は"やってみせる"分野が極めて狭く、五十六元帥の名格言は実行できませんでした。最前線で鉄砲を撃ちたがる習性もあまり改善されなかったような気がします。

教授になって4~5年目から、乳癌、肝癌、IVR の全国学会・研究会の役員となり、IVR 学会の制度改革や乳癌の専門医制度、肝癌取扱い規約改定などに取り組みました。30年間続けてきた臨床の現場での仕事量が減り始めたのも事実です。特に2000年代に入り、全国学会開催、学会役員活動、ガイドライン作成の方に熱が入ってしまいました。2002年より6年間、私の生涯の仕事であるIVR 学会(会員2,275人、準会員155人)の理事長をつとめました。その他、肝癌研究会幹事、日本乳癌検診学会理事、MMG検診施設画像評価委員長など、全国的な学術活動も歴任してきました。

私の最近10年間のうち、一番時間を割いた仕

事は科学的根拠に基づく"肝癌診療ガイドライン"の作成でした。2005年に第1版が、2009年に第2版が(共に日本語、英語版あり)が発刊されました。私は6章あるうちの1章、肝細胞癌の肝動脈(化学)塞栓療法「TA(C)E」の章を担当しました。過去約20年間のTA(C)E関係の英文論文をまず、全国のIVR仲間に送り、abstractを読んでもらい、エビデンスレベル(EBM:メタアナリーシス、ランダム化比較試験、コーホート研究、等)の概略を報告してもらいました。ご協力して下さった約20名の仲間には深く感謝しています。その中から、科学的根拠の高いと思われる論文を1版ごとに、100論文以上分析しました。

肝細胞癌の領域では EBM level の高い論文は極めて少なく、ほとんどが Level が高くても level 2 から level 4 の論文でした。これらのレベルの中でさらに論文の優劣をつけて、取捨選択をする必要が生じました。このため、各論文の対象症例数、追跡期間、脱落率を調べてそれによるランク付け(エビデンスレベルの亜分類)を行い、二次選択の採択基準としました。この作業のためには論文の抄録だけではなく、本文を詳細に調査する必要があり、膨大な仕事量となりました。

2005年版ガイドラインでは7つのTA(C)E関係 の Research Question (RQ) を作りました。文献 検索時に個々の論文で① TA(C)E の定義が一定し ない、塞栓物質未使用症例も入っている、②カテ ーテル挿入部位、Lipiodol emulsion や抗癌剤の使 用量、使用抗癌剤が一定しない不明な論文もあ る、③繰り返す TA(C)E の時期(間隔)が一定し ない。短期間で繰り返す症例が多い(再発の有無 と関係なく施行)、④新しい残肝予備能は導入さ れていない、等、種々の問題点が存在しました。 EBM を加味したサイエンティフィックステート メントや解説を加え、推奨のグレーディングを行 いました。2009年版でも前版と同様のRQ(2009 年版からは Clinical Question : CQ に変更) を 6 つと新たな CQ を 1 つ追加しました。この中で Grade A(行うより強く勧められる)と推奨でき る、RQ(CQ)はわずかに1つだけでした。 "Okuda 分類 I 、 II 、Child A、B の進行 HCC に対する TA(C)E の適応は存在する"との Meta-analysis 論 文 1 編、RCT 論文 2 編が 2000 年初期に認められ ました。2005年のガイドライン発刊以降、海外 を含めた論文では TA(C)E の方法、適応や治療効 果等の用語や定義を本邦と同様に扱った review 論文が一流誌に多数掲載されています。TA(C)E と他の治療法との混合治療の有用性を模索する EBM の高い論文が出てきているところです。

4. 約30年間の福大医学部での生活で実感した変化について述べます。

①約30年前は学生さんは授業やBSLに対して 消極的で、無言の人が多いような感じでした が、20年くらい前から徐々に学習の場にも積極 的に参加し、はっきりと発言する人が多くなっ たような気がします。良く勉強するようになっ たという印象を持っています。本学のみなら ず、他施設に行っても活躍している若手医師の 数が増加していることが証明してくれているも のと考えます。他施設の人から本校の卒業生が 頑張っている話を聞けるのは最近の私の楽しみ の1つです。その最大の原因は、teaching staff の大多数を本学の卒業生が占めるようになった ためと考えます。後輩に対する先輩の愛情、情 熱がもたらしたものと思います。国家試験の合 格率が問題となっていますが、約10%の学生さ んに学習意欲をいかに向上させることが出来る かが重要と考えます。何も出来ずに勝手なこと を言って申し訳ございません。

②職員駐車場のことです。30年前は午後7時を過ぎたら、病院の裏の職員駐車場にはほとんど車がいなくなっていました。しかし、15年前くらいから台数は年々増加し、現在では土曜の午後、日曜でもかなりの車が見受けられるようになっています。遅い時間や休みの日まで、仕事や勉強をしているスタッフが増加している証と考えます。

③毎年1回、講座別にスタッフ名、助成金や研究資金の取得内容、学会活動、論文、等を記載した年報が発行されています。各講座の多くは年々、これらの質、量、数が向上しています。臨床系で言えば、患者数の増加と業績との関係は相関するという感じを持っています。

④ Club 活動のことです。私が特に感じるのは、あるいくつかのスポーツ愛好会は先輩、同僚、後輩との連携はまさしく前述"One for all、All for one"で学生生活から医師になっても互いを庇いあい、助け合い、指導し素敵な医療軍団がいることです。愛好会の活動の活性化が心温かい医療の推進及び国家試験合格率向上には必須と考えます。

5. 最後に私が少しは大学に貢献しえた(?)かと思われる数少ない事項を述べます。

①約 20 年前には、各講座 (科) 別にカルテが存在しました。したがって、患者の医療情報を把握するためには何冊ものカルテを引っ張りだす必要がありました。がんセンターで導入されている1患者・1カルテ制度を部長会に提案しましたが、最初は「自分のところのカルテは見せられない」という理由で反対意見が多かったのですが、当時の菊池院長の御英断で同制度が導入され、患者を経時的、総合的かつ効率的に見ることが可能となりました。現在は電子カルテに変わり、自動的に同システムに変わってますが。

② 20 年前までは有給のスタッフの医師以外には PHS は配布されていませんでした。 PHS を持っていない若手医師や看護師、技師が臨床の現場では最も動き回って働いてくれています。 これらの重労働者との迅速かつ確実な連絡を取れることが臨床の場で最も重要です。 部長会で「出来るだけ、これらのスタッフへの PHS を支給して下さい」と提案しました。 直ちに病院側は PHS 支給を実行してくれました。その迅速な対応は大学生活で最もうれしかったことの 1 つです。

③福大病院の理念の公開募集が約15年位前にありました。私も現在、本院の理念となっている"暖かい医療"という言葉を提唱したうちの1人です。

私の福大での最後の大仕事は第 45 回日本肝癌研究会を 2009 年 7 月 3 日~ 4 日に開催した、ことです。私の肝癌の仕事をご指導いただいた、故板井悠二教授、幕内雅敏教授、神代正道教授、神田極教授、等の強力なご支援で同研究会の会長に選出されました。初めて会に Live demonstrationを導入して過去最大の 1300 名以上の参加者でした。本学放射線科の仲間を初め、多数の先生方、40 年来の先輩、仲間、特に IVR 仲間、コメディカル及び関連企業のご協力とご支援で会を無事開催することができました。本当に有難う御座いました。

最後に約30年間、福岡大学で皆様のご指導、ご協力のもと、大声で楽しく過ごさせていただきましたことに感謝します。福岡大学の更なる発展を祈念して項を閉じさせていただきます。

特集"名誉教授からのメッセージ"

*掲載は到着順とさせていただきました。

近況のご報告

白日高歩 福两会病院 院長



現在、福西会病 院に勤務していま すが、大学にいた 頃に比べて随分と 環境の変化を感じ ております。福大 在任中、病院長を 4年ほどさせてい

ただきましたが、民間病院の経営はそれなりに難しくま た魅力的でもあり、試行錯誤しながら何とかヨタヨタ前 に進む毎日を送っております。

個人的には大学退任前から取り組んでいた「呼吸器

外科手術書」を、今年5月ごろ医学書院(東京)から出 す予定で、自分の専門領域における最後の仕事とな る感がいたします。どの程度、若い方々に利用してい ただけるか不安ですが、ほとんど独力で取り組んだ本 なので出版されれば喜びもひとしおだろうと思ってい ます。

健康状態はまあまあですが、脊柱管狭窄症状が出 てきていますので、いずれ手術を覚悟せねばならぬ でしょう。添付写真は昨年の胸部外科学会地方会で 特別講演の司会をさせていただいた時のものです。 学問の進歩には後ろの方からでもくっついて行くつもり です。

福岡大学医学部と現在の私

河 田 溥

2003年3月一杯で福岡大学医学部を退職してか ら8年が経過した。福大在職中、研究においても教 育においても何一つ人様のお役に立つことができず 忸怩たる思いであるが、昨今のわが医学部の目覚し い発展振りを目にして感慨無量のものがある。本稿 では私の個人的な体験と現在の所感を語ることをお 許し頂ければ幸いである。

余り病気をすることのなかった私もこれまで3回程 大病を患った経験がある。子供の頃にいわゆる疫痢 を罹患し聖路加病院に入院したときが最初、次は在 職中の16年前にアニマルセンターで突然脳梗塞の 発作に見舞われて倒れ、福大神経内科のお世話に なったとき、3度目は昨年秋に急性心筋梗塞を起こし 今度は循環器内科のお世話になったときである。畏 友西丸雄也教授 (現名誉教授) をはじめ神経内科の スタッフの方々に助けて頂いたし、今回の心筋梗塞に 際しても朔 啓二郎教授、西川宏明講師をはじめ循 環器内科の俊秀の方達に素晴らしい治療を施して頂 き、今では元と同じような生活ができるまでになった。 今年1月の最初の受診日にはオープンして10日目 の新診療棟にハートセンターを受診したが、この診療 棟別館の威容には目を見張る思いであった。これま

で福大医学部・病院を支えてこられた多くの先輩・同 僚の方々、卒業生の諸兄姉達、それに教育・医療に 携わってこられた全職員の方々の並々ならぬ努力の結 晶に他ならないと思う。

私自身は退職後少し時間的なゆとりができたの で、子供の頃から親しんできたピアノの練習を始め、 これまでに4回市内のコンサートホールで演奏会を 催すことができた。果してこれが人々の役に立ち、ま た自分の痴呆予防に役立つのかどうかは知る由もな

最後に福大医学部・病院の方々に心からの感謝を 捧げるとともに、益々のご発展をお祈り致します。

 $(2011 \cdot 1 \cdot 20)$



何でも診てくれる暖かい先生

医療法人福西会理事長 有 吉 朝 美 (平成 15 年退職)



医学部創立に情熱を傾けた1970年代を懐かしみながら、OBになった今、福大を懸命に応援しています。退職ののち勤めている川浪病院(医療法人福西会、198 床)はオーナーの川浪理事長が引退され、平成17年末から共同運営

体制となり病院名も福西会病院に変えました。福大病院とは至近距離にありますので緊密な連携のもとに地域に密着した急性期医療を行っております。また早良地区には、パーキンソン病の拠点およびリハで実績のある福西会南病院(療養型110床)と二つの老健施設があります。福大の先生方には暖かいご支援を頂いており、心から感謝しております。

さて、私が福大病院長を仰せつかったのは平成9年末で、不祥事件の後で暗いムードが漂っており、病院の信頼回復と職員の志気の高揚とが必要でした。翌年春、久留米大学で素晴らしい新診療棟のお披露目があり、九大でも総予算740億円といわれる新病院の建築が進行中でした。一方わが福大病院は、開院25年を経て老朽化が進み、スペース不足はますます

顕著になっていました。「プライバシー、アメニティ、バリアフリーを採り入れた新しい診療棟を作ろう」と提案し、明るい目標のもとに一致団結して頑張りたいと願いました。以後、皆さんの熱意と努力のお蔭で12年を経て素晴らしい新館が完成したことを心から喜んでおります。今後はハード面の第二ステップとして本館の建て替えと機能的な一体化を図らなければなりません。厳しい医療経済の中にあって難事業ですが、懸命に応援したいと思います。

もう一つソフト面については、「どんな医療人を育て、 どんな医療をするのか」という理念の再確認が必要で はないでしょうか。 九大とはひと味違った暖かい臨床 医を育てるというのが福大の使命だと思うのです。

初期医療に長年貢献した宮城征四郎氏(沖縄中部病院)は、「今の日本の医学教育は臓器別に専門化され、病人をパーツ毎に分割治療し、全人的に診る医学教育をなおざりにしている」、「離島や医療過疎地に[行かない]のではなく、総合力に欠けるために[行けない]医師を育てている」、と痛烈に批判しています(日本医事新報 4445 号、2009/7/4)。

さすがは福大出身の先生と云われるような、「何で も診てくれる暖かい先生」が育つことを心から願うこの 頃です。

近況報告

廣 木 忠 行



福大を定年退職してから、八年経ちました。現在、久留米大学医学部トランスレーショナル・リサーチセンター内の久留米臨床薬理クリニック所長をしています。クリニックの業務は治験ですが、診察は短時間ですむのに、

待機時間が長いので、待機中、報告書の作成と治験 関連の本やジャーナルの閲覧の他に、来し方を省み て、エッセイなどを書く余裕もあります。 医学生の頃 から親しんできた音楽愛好の遍歴を綴った「黄金の 歌声に魅せられて」がメディカルトリビューン紙に、北京の人民大会堂で行われた日中医学協会主催の笹川研究者制度二十周年記念行事に参列した際に、巡り会った漢詩「楓橋夜泊」との係わりを記した「北京好日」が日本医事新報に載りました。クリニックの業務以外では、福大在職中から続けている厚生労働省福岡地方労災医員として、年間十数件の心臓疾患関連の事例について、業務と心臓疾患との医学的因果関係の有無を意見書にまとめています。ここ数年、不意に、旧友の訃報に接し、愕然とする日々が多くなりました。わが身にも老いの年波が押し寄せてきていますので、二度目の退職の潮時を見計らっている所です。

後期高齢者の仲間入り

西 丸 雄 也



福岡大学を退職した直 後、裏の土地を入手できた。 この1年はここで育てた草木 を眺めている時間が長い。 冬の庭は寒々としている。こ の家に移り住んで約20年、 庭木の入れ替わりも激しい が、現在最も枝を張っている のは枝垂れ梅(紅梅)と源平

桃(白と紅の花が一本の木に咲き誇る)である。 開花 も間もなくであろうか、蕾が少し色づいている。山茶花 は冬の庭を守っている。白の八重の花と薄い桃色の花 が1月末の景色を作っているが、前の家から一緒に移 住して来た赤と白の侘助も大きくなった。裏庭の主役 は肩を怒らした枝垂れ桜である。まだ蕾は硬いが間も なく春が訪れる。その他にも多くの草木が、所狭しと 競い合いを強めている。どの木が頭角をあらわすの

か。昨年後期高齢者を機に第一線を退いて、週1日 の診療に余生を送っている 75 歳 (3 月から 76 歳) の 老医師が彼等の成長を暖かく見守っている。

退職後に大学での専門性を深化させるのは難し い。私は幸運にも退職前から二つの脳卒中再発予防 に関する全国的な共同研究に携わった。一つの共同 研究では約1500例の脳梗塞症例のMRIを一人 で、他の一つの共同研究は最近終了したばかりである が、同様に約2700例の脳卒中症例のMRIを二人 で読み、診断の適格性を判断する役割であった。こ の時期はMRIの撮像方法が次つぎに発展した頃 で、全国の脳卒中を専門にする内科・脳外科の病院か ら送られて来る、脳梗塞と診断された症例のフイルム を学ぶ事ができた。批判するには自分でも知識を習 得する必要があった。振り返れば、物忘れはひどくな ったが、月に一度程度の医学部図書館通いで、認知 能力の維持に努めている。

"武士道"(日本人の魂)啓蒙活動の日々

彰 田中 前筑紫病院 院長

150年前、江戸時代末期に、近代日本キリスト教 創始者の一人である新渡戸稲造博士は、誕生した。 そして、"武士道"という書を記して、The Soul of Japan (日本人の魂) のタイトルで、世界的ベストセ ラーになった。戦前の修身ないし道徳教育につなが るものであるが、戦後アメリカ進駐軍の GHQ は、戦 前の日本軍国主義を壊滅させるため、全否定して、 日本人の魂を奪い去ったのである。これに、日教組 など左翼が乗って、自虐史観の下に、団塊の世代を 教育してきたのです。その典型が、日の丸と君が代 の拒否問題である。しかし、武士道の教えの本質は、 "武士が武士としての責任を負うことができない時 は、腹を切って、自害せよ"ということであり、武士道 が佐賀の鍋島藩に伝わると、その自害を葉隠れと呼 んだ。このように、戦前の日本には、男としての人生 観、死生観が厳然としてあったのだ。"滅私奉公" が、老若男女、すべての国民に浸透し、日本国なら びに天皇陛下に自分らの命をささげることが、日本人 の儀であったのだ。しかし、戦後こうして形成された 団塊の世代の甘ったれと優しさが、ひ弱い草食系の

子孫を産みだしたのだと私は考える。いずれにして も、今の日本、今の日本人は本当に狂っている。亡く なった親の弔いも死亡届もせず、その親の年金で生 活する子孫、幼子をいとも簡単に殺傷する若い親。 こんな親を産み、育てたのは、団塊の世代ではなか ったか? 我々に一次的な責任があると考える。多く の方が、今の日本の閉塞状態に危機感を覚え、政治 は何をしているかと苛立っておられると思う。しかし、 先日の中曽根康弘と石原慎太郎との対談でも語られ ていたが、戦後の日本国民の平和ぼけというか平和 毒が国民一人一人を駄目にして、国家を背負うとい

う意識がな くなってき たからだ。 民主主義 の選挙制 度の下で は、国民の 政治意識 レベル以



上の政府はできるはずがないと述べていたが、全く同感である。今、我々が立ち上がらないと、子孫に極めて惨めな将来を託すことになる。私自身には、何の力も残っていないし、病身の身で残された時間も少ない。それで、志を同じくする者と民主党若手代議士

が定期的に集い、意見交換をし、講演会を催して、 啓蒙活動を広めている昨今である。福岡大学の皆さ まにも、ご理解とご声援を賜りたいと願うものである。 よろしく、お願い致します。

近況報告

元泌尿器科学 坂 本 公 孝



烏帽子会会報50号発刊にあたり、私共退職教授にも執筆の機会を与えていただき、有難うございます。 私こと、

退職して15年になりますが、多くの方々に支えられて、83歳の今日まで生き延びることが出来まし

た。このことをまず、感謝したいと思います。

長い間、実務から離れておりますので、特にご報告するような事項はありませんが、あえて申しあげれば、曽田豊二名誉教授が中心になって始められた「養生相談室」と称するささやかなボランティア活動のお手伝いをしています。内容の詳細は省略します

が、早いもので今年(2011)5月で、 10年目に入ります。

私自身、明確なモチベーションをもって参画したわけではありませんが、現役時代目を向ける余裕がなかった医療のあり方について、じっくり考える機会が与えられたことは、誠に得がたい体験でした。

幸い、読売西部本社の医療担当責任者が関心を寄せて呉れて、「現代の養生を考える」という主題のもと、養生相談室のPRを兼ねて、年1回市民公開講座を開催しています。昨年(2010)は第3回になりましたが、「身の回りの医療」というサブタイトルをつけて実施しました。まず「医者が患者になった時」と題する鼎談で、曽田豊二、今永一成両名誉教授と私が、入院したり、手術をうけたりした体験談を率直に披露しました。さらに、渡辺良二博愛会病院副院長(福大8回生)らが加わ

って、上手な病院のかかわり方とか不安を与えない話し方など、身の回りの医療に関する諸々の問題点をピックアップし、患者教育もあわせて行いました。話の進み工合で、若い医師諸君には多少耳の痛い内容にも言及しました。日頃実践したり、これからしたいと考えている健康法をまとめた「私の平成養生訓」も一般から募集しましたが、司会者から命ぜられて、私自身の養生十訓も一夜漬けで作ってみました。駄作ですが下記に紹介させて頂きます。

腹八分/足腰鍛えて/程々に タバコはやめて/酒はたしなむ 七十従心/がんは友 オシャベリしながら/心安らか 養生十訓有難う



第3回よみうり市民公開講座出演者 前列右より2人目:曽田名誉教授、3人目筆者、

中列: 今永名誉教授、

後列中央:原信之福岡県すこやか健康事業団会長

• 九大名誉教授

会病院副院長(福大8回生)らが加わ 左端:渡辺良二博愛会病院副院長・福大8回生

近況報告

大 島 健 司



昨年暮に 福岡大学病 院の新築棟 の披露に招 待され、行 ってみまし た。素晴ら しい建物で、 外来へのア

クセスがよく、地下鉄の駅からそのまま受付に行けるよ うになり、以前と隔世の感がありました。昔の香椎病 院からの移転、今までの大学病院としては多くの施設 の不備があって、これを使いこなすのに苦労した事を 思い出しました。改善されている事を期待します。

私は現在、福岡市西区戸切にある村上華林堂病院 に週2日(木,金)診療を続けさせてもらっています。

以前から趣味であった民俗学、考古学、史学(特に 中国)の勉強は続けていますが、ここ数年は白川静さ んの文学にのめりこんでいます。

身体の方は年齢相応に体力が低下して来た事を自 覚させられていますが、幸いに健康ですので旅行や 美味探求を楽しんでいます。

いつも冬にスキーに行く事は欠かしません。

写真はカナディアンロッキーにスキーに行った時の ものです。

まだ数年はスキーに行けそうです。

(左上)カナディアンロッキー、サンシャインビレッジス キー場にて。 左が私です。背景に 2,000m 級の山々 が見えます。

(右下)カナディアンロッキー、レイクルイーズスキー場 にて。ロッジの前。中央が私です。



近 況

菊池昌弘



大学を退任して既に4 年が経過しました。この 間リンパ腫を発病、再発 と闘病に明け暮れた感が 強いのですが、特に病状 を見ない時には市中病院 の管理業務と病理診断で 過ごす日々は大学時代と 内容的にはあまり変わっ

ていません。ただ病院管理は大学と異なり医療制度 の変更による影響が直接に響くので常に気をつけて おかなければならないようです。昨年度の医療費改 定で少し収益性が改善されましたが病院再生産の為 にどの程度の収益性が必要とするのかについて明確 な目標が立て難いことが長期的計画を定め難くして います。ただ大学と異なり責任も重大ですが問題点 に即座に対応出来ることは自営病院の優れた点と実 感しています。病院の目標を定め現状を考慮しなが ら着実に計画を進めていくには我が国の長期的医療 制度の確立が必要であることを痛感しています。目 下の病院計画としては糖尿病を軸としそれに関連す る疾患に対応できる病院を目指し専門外来、神経、 血液、循環器、消化器、呼吸器内科のみでなく、関 連する眼科、外科、整形外科とともに血液浄化セン ターを揃えその充実をはかることから始めて将来は近 接して高年者賃貸住宅をそろえることができればと 考えています。

近況報告

西園昌久



現在、博多駅前3丁目 のあるビルに「心理社会的 精神医学研究所」と名づけ た自前の小さな施設を開い ています。精神分析での 治療や指導をするほか、毎 週水曜日の夕刻、若い精 神科医を対象に「精神療法

講座」を開いています。市内はもちろん、北九州、久 留米、大分、熊本、佐賀などからも受講者がありま す。また、同じビルにある精神科クリニックで週2 日、一般の精神科診療しています。その他、週一回 は福間病院に出かけて、若い精神科医の皆さんと重 症患者を診たり、コ・メディカルに講義や症例検討し ています。以上が日常の仕事です。年中行事として は、研究所の事業として、「日韓両国の若い精神科 医のための合同研修会」を、毎年、4泊5日で福岡と ソウル (時に、釜山・慶州) とで交互に開催していま

す。すでに11回重ねたので両国の総参加者は500 名を超えたと思います。

他に、「PPST 研究会」と名づけた法人組織をつく り、その理事長をしています。これは、それぞれ進歩 著しい薬物療法(P)と心理(P)社会(S)的治療(T)の 統合をはかり、精神科治療の効果を一層高めようと する研究会です。全国を11ブロックに分け、毎年 1回は各ブロックでセミナーをやることにしています。

私自身の健康管理は内科におられた浅野喬先生 のお世話になっています。自分でもヘルスクラブに 行ったり、出張先でジョギングしたりしています。中 洲にはもう行きません。

最後になりましたが、数年前、アメリカ精神医学会 からクンポースー賞を受賞した折は、高木忠博会長 がわざわざ烏帽子会からのお祝いに、私の自宅まで お出で下さいました。この機会に心からお礼申しま す。

近況報告

松崎昭夫



早いもので退職して7 年になります。退職後は 医学と縁を切り趣味を楽 しもうと思っていましたが、 第3回卒白石先生の好意 でまだ仕事をさせて頂い ております。全てがおっく うになり趣味を楽しむより

無為に過ごす日々が多いのが現実です。退職前に 偶然見つかった不整脈は近所に開業している第9回 卒の小田先生に投薬を受け、年一回は浦田教授に診 て頂いています。数年来逆流性食道炎に悩まされ、 朝方早く目が覚めますので、血圧治療の補助として 早朝ウヲーキングをしています。冬は真っ暗ですが 春先からは雲の変化、道筋の生け垣、塀や玄関に飾 られた草花などを楽しむことが出来ます。寒い季節 は真っ暗ですが、ウヲーキングや犬の散歩をさせて いる人がいます。 "おはようございます" と声をかけま すが返事のない人がいるのは残念です。明るい季節 には見かけた路地にも入り込みますがとんでもないと ころに出て、知らない場所が多いのに驚いたりします。 数年来の花粉症が徐々にひどくなり今は投薬、点眼 薬も効かず、ひどいときは何もする気がしない状態 で、4月一杯までは憂鬱です。

医師会釣り倶楽部に入れて頂き月1回出かけます が、福大医学部卒の先生方何人かと一緒になり昼食 時にはビールを楽しむこともあります。釣果は良くあり ませんが、釣った魚を肴に酒を楽しんでおります。

暇人の日常生活

小 田 禎 一



ました。これからの生き方、死に方は全く想像がつきません。ありのままに過ごそうと思います。私の体内にはいくつもの人工物が取り付けられています。左右の水晶体、冠状動脈の2本のステント、歯のインプラント(予定)、左股関節の人工骨頭(予定)などです。医学の進歩に感謝せざるを得ません。福大病院と福大医学部卒業生の方々にはこれまで本当にお世話になりました。心から感謝します。これからもどうかよろしくお願いいたします。皆様が医師として活躍しておられることはどんなに頼もしく、嬉しいことでしょう。私

は決して良い教師ではありませんでしたが、皆様を見るたびに、長年福大医学部に勤務させていただいたことの光栄を覚えます。

晴れた日には杖にすがって公園歩きをします。右 下肢の痛みは軽いので、自動車の運転は自由にでき ます。身障者ですので駐車場は無料、高速道路は半 額となります。植物園、動物園、油山市民の森、花畑 園芸公園、油山牧場、友泉亭などが行きつけです。 老妻も気が向けば同行します。自然の姿が数日で変 ることに驚かされます。街歩きや会合などではあとで 痛みが増すことが多いため、なるだけ控えています。

雨の日には雑多な読書と、写真の整理をします。 一眼デジカメとパソコンは、できるだけ軽いものへと次 第に買い換えています。数年前までは重さが気になら なかったのですが。カメラもパソコンも、医学と同様、 日進月歩です。そのことがある種の期待感を抱かせ ますが、それは皆様の将来にかける私の希望とは次元 が違い、比較になりません。典型的な暇人の暮らしの 中からではありますが、常に皆のご多忙を想い、ご健 康とご発展を切に祈っております。

近 況

朝長正道



2000年退職。81歳。 心身ともに健康である(と信じることにしている)。

退職後の 病歴:軽度 糖尿病、左

加齢黄斑変性、左被殻小出血、左坐骨神経領域帯状疱疹、前立腺肥大と夜間頻尿。

現症:身長 171cm (-3cm)、体重 77kg (-12kg)、 血圧 140 — 80mmHg (ミカルデイス 40mg)、血糖 125mg、HbA1c6.0、尿酸 7.6mg、その他検査異常 なし。

右眼視力 0.8、読書はできるが疲れやすい。片足立ちやや拙劣。階段を降りる時手摺りが欲しくなる。

急いで話す時言葉が少しつまる。その他身体的異常なし。

認知症:運転免許更新の高齢者講習での検査 A ランクで正常判定。記憶力軽度低下。スケジュールは必ず手帳に記載。人名のど忘れがひどくなった。しかし家内、子供夫婦 6 人、孫 3 人そして兄弟姉妹の名前はまだすらすらと言える。ただし皆の誕生日および自分の結婚記念日はあやふや。好奇心は極めて旺盛、お店でつまらぬ質問ばかりすると家内から何時も叱られる。

仕事:責任ある仕事が3件、その他会長職や顧問など数件。責任のある仕事をさせていただいていることが何よりも有難い。社会のお役に立ち、老化防止にもなっているのが嬉しい。退き時は常に考えているつもりである。

生活:家内と二人暮らし。毎朝神棚と仏壇へ感謝 の礼拝。原則として週5日出勤。朝早かったり遅か ったり、午後だったり不定。帰りはおおよそ6時すぎ。 週平均2晩仕事と称して外食。特に運動はしていない。一日の歩数は大体3000から6000歩程度。草むしりで晴耕雨読の真似事。晩酌原則ビール1杯。 酒が弱くなった。時々自宅で若い人たちと深夜まで 酒盛り、翌日は確実に二日酔い。

心掛けていること: 現実的目標を持つ。多くの人と 話を楽しむ。大いに笑う。欲を抑え込まない。そし て何事も自分に都合よく解釈する。

知行合一

特定医療法人原土井病院 顧問 今 永 一 成 福岡大学名誉教授(生理学)



70歳で定年退職後友人の主管する原土井病院で職に恵まれ4年経ちました。その間産業医(日本医師会認定)、健康スポーツ医(日本医師会認定)、健康科学アドバイザー(日本体力医学会認定)の資格を取得し大学在任中専門としていた心臓・循環生理学を活用出

来る分野で、運動生理、運動療法、健康相談、医師会主催市民健康教室などで運動習慣を啓蒙し健康寿命を延ばすべく活動しております。また日野原重明先生会長の「新老人の会」にサポート会員として参加したり、曽田豊二先生の主宰する「養生相談室」参加の機会にも恵まれ坂本公孝先生、利谷昭治先生、壇健二郎先生達からも教えを頂いております。基礎医学研究から離れましたが新しい知見を臨床現場に応用すべく今もいろいろの学会や研修会にも参加するように心がけ、新たな生き甲斐を感じております。

私が中濱(ジョン)万次郎の玄孫(母方の祖母が万次郎の初孫)にあたること故、県内外のいろいろの大学から万次郎に関する講演依頼が多くなりました。1841年土佐清水の貧しい漁師の家の少年が出漁中

遭難しアメリカ捕鯨船に奇跡的に救助され、船長や 住民の善意のもとで当時ただ一人の日本人として未 知の異文化のアメリカ社会の中で10年間英語や算 数の初等教育、数学、測量術、航海術、造船術など の高等教育そして捕鯨船乗組員としての試練を受け 鎖国の日本に必死の思いで帰国。まさにペリー提督 来航の時にあたり、幕臣ヘアメリカ事情を伝え的確な 助言により難なき開国に導き、その後自らの体験をも とに明治維新の志士に英語、自由平等、共生、隣人 愛、国際性などの思想そして測量術、造船術、航海 術、捕鯨術などアメリカ文明・文化を藩校や明治政 府設立校で教授し多くの人材を育成しました。若干 14~24歳の青年の、「自分の運命を自らの努力で 切り開いたパイオニア精神」と「救助した船長と万次 郎の子孫の国境を越えた160年も続く心の絆」が如 何に育まれたかを若い学生諸君に訓話致しておりま す(最近では平成23年4月26日、福岡大学言語教 育研究センター主催で「中濱万次郎のパイオニア精 神」と題して講演致しました)。

福岡大学医学部卒業生諸君の活躍を見聞、身もって体験し頼もしく思っております。医学部・同窓会そして会員の皆様の益々のご発展を祈念致します。

平成23年4月吉日

近 況

八尾恒良



退職後、6年の現状は以下の通りです。

佐田病院の9階の広い部屋に、筑紫病院在職中の教授室の荷物をすべてぶち込み、使わせてもらっていますので、週4日くらいは不規則に出て行ってい

ます。診療は週2日、頼岡 誠君(16回生)を中心とした筑紫病院からの出張3名の消化器科の医師の助けを借りて、クローン病、潰瘍性大腸炎の患者さん約30人を中心に診療しています。内科には仁位隆信君(4回生)、安藤智恵さん(18回生)もいますので助かっています。

時々の学会出席の他、東京には月 $1 \sim 2$ 回は出て行っていますし、症例をまとめたり、一寸した原稿、

本の編集、碁、麻雀、飲みごと、などで退屈はしていません。酒は随分量が減りましたが、まあ、50台の人達の平均以上は飲んでるかも知れません。

残り少ないので、遣りたい放題やる気ですが身体的に問題が出てきました。社交ダンスは腰痛のため昨年で中止、最近ぎつくり腰で新原君のお世話になり

ました。また、今日片付けようと思ったことの外に別の用事が舞い込むと、必ず何かを忘れる、新しく買いなおしたパソコンが使いこなせない、など問題は少なくありません。

まあ、"なるようにしかならんばい、" という心境です。

近況報告

満 留 昭 久



福岡大学を辞職しては や5年になります。この 間の医学部の発展を外か らみていてたいへんうれし く思っています。私は現 在コメディカルの専門職 を養成する大学で教育の 手伝いをしております。

また福大を退職してから「里親を増やす」市民参

加型里親普及事業に参加したり「子どもの村福岡」を つくる NPO の立ち上げなどのボランティア活動を始 めてきました。とくに「子どもの村福岡」は多くの人び との善意をいただき平成 22 年 4 月に開村することが 出来ました。

「子どもの村福岡」は虐待などいろいろな理由で家族と暮らせなくなった子どもたちを親に代わって育てる(社会的養護と呼んでいます)新しいモデルを作ろ

うというプロジェクトで、国際的な NGO "SOS キンダードルフ"の理念を尊重する日本で初めての試みでした。

「子どもの村福岡」を設立するにあたり、その主なコンセプトとして①SOSキンダードルフの理念とプログラムを尊重して、わが国の里親制度を生かした「新しい家庭的養護のモデルを作る、②1軒の家に育親(里親に相当)と数名の子どもたちが生活する、③育親はプログラムに沿った研修を受ける、④子どもの村の村長は村の運営と育児支援の中心となり、専門家による支援体制のコージネーターとなる、⑤福岡市行政、地域との理解を得ながら進める、⑥市民や企業などの幅広い資金の支援体制をつくる。などをあげております。

村が出来て1年、今は基礎作りの段階ですが多くの人の支援を必要としています。同窓会の先生方も一度ホームページ(子どもの村福岡)をみていただき、ご賛同いただきましたらぜひご支援ください。

近 況

有 馬 純 孝

所詮、時間に敗ける。

今の間は、散歩と徘徊の違いは理解できている。 孤独と物忘れと闘いながら、呆け防止に、老健に勤めて老・老診療中です。

入所者に深く接すると、どちらが認知症か分からなく なる。

老人力を発揮するには、健康第一と思うが 今までの不摂生の"付け"が重い。 体を騙しながらとは思うが、

"騙すに手無し"

笑顔で遣り過ごすしかない。

大学の益々の発展を祈っています。



近況ご報告と、新診療棟の内覧会に参加して

医療法人東洋会池田病院 理事 池 田 靖 洋 (福岡大学名誉教授)

原稿のご依頼に"ご消息をお知らせいただきたく・・"とありましたので、先ずは、近況を報告させていただきます。

テニスは、長住テニスクラブに自転車で通い、週3 ~5回プレイをエンジョイしています。仕事は、島原の池田病院に月1回行っておりますが、些か休養し過ぎましたので、4月からは、社会医療法人至誠会木村病院(博多区千代)で、毎週月曜日の午後、専門外来(主に胆膵関係)の名目で診療させていただくことになりました。よろしくお願いいたします。ちなみに、現役時代と異なり、自宅での家内との夕食を第一義とし、夜間の外出をなるべく控えております。そのことで、皆様に不義理が多いことを大変申し訳なく思っておりま



す。おり男回記にお今指おす。世ま丈卒)田務まとより明は病しす。もとよいはな長3上院で、ごくま

先日、新診療棟の内覧会に参りまして、情報部の志 村英生教授、消化器内科の岩田 郁先生にお会いし、 案内していただきました。外来へのアクセス、臓器別 センター化、行き届いた設計、その日は快晴でドーム 球場を見渡せる素晴らしい展望に大変感激いたしまし た。緑樹と池があると気持ちが和みますが、上からの 眺めで、五ヶ村池のまわりに緑が少ないことに気付き ました。そして、頭に浮かんだことは、池の周りを整備 して、夏の日差しを遮ってくれる木々を植樹し、ベンチ で患者さんや多くの人が憩い、ウォーキングやジョギ ングも楽しめる「さわやか遊歩道」を公園風に築いたら という構想でした。予防医学センターやメディカルフィ ットネスセンターの理念とも、予防医学・健康増進とい う観点で関わりがあります。さらに、これに付帯して、 院内の外来食堂を移動し、池にせり出た瀟洒なレスト ランにすることです。現在道路沿いに集まってくる鯉 をテラスから眺めることもできます。そこでのひととき が、気持ちの疲れを癒してくれる筈です。

福岡大学は、幸い地下鉄に恵まれました。医学部・病院、地域の方々だけでなく、広く市民に、憩いの場として訪れていただければ、病院の益々の発展に繋がるものと考えます。一笑に付されると思いますが、瓦林達比古副学長の将来構想を期待して、同窓会の皆様のご健勝と福大病院のさらなる発展を祈念して、稿を終えます。

初心は忘れ得ない

曾田豊二



1) 同窓会会報記念特集 号に執筆の機会を得て、 感謝をしています。

このような際に、まず心に思い浮かぶことは、やはり医学校創設当時のことで、その作業の一端に参加させて頂いたことであります。当時、私にとっては、すべて初見のこと

であり、真剣勝負にも似た日々であったことを想い出します。

勿論その創設の大事業の大変なご苦労の数々は、 当時の理事長、学長、及び大学執行部の関係された すべての方々の胸に強く刻まれており、いろいろな形 で記録されておりましょう。そのようななかで現場の 一人となった新参の私どもも、聊か、気負っていた感 は否めませんが、この後発の新設医科大学の置かれ ている情況・位置などを勉強させて頂くにつれて、こ の折角の折を機として、それ迄の他の大学の施設・

構成・組織力には及ばずとも、新鮮な医学教育・医学 生教育を組み立てることの大切さを思い知り、それに 想いを馳せました。そしてまた、その基盤となる臨床 現場である新病院がまずこの地域のニーズに応え得 ること、そして大学病院としての方向と在り方に間違 わずに、また遅れを取らないよう一致協力、努力をい たしたことを思い出します。

皆のこれらの考えと行動は学の内外にゆるやかで ありましょうが、次第にその評価が得られていったの ではないかと思っていました。

2)この折忘れ得ないことは、学部設置法規上必要と された認可前の暫定病院の保持・設立であり、その 為、行われた九州電力のご協力による福岡大学・香 椎病院の発足でありました。先行発令された少数の 教職員は旧・九州電力の方々のご協力を得てこの地 に臨床病院を順調に行い得て、しかも後に閉院に際 しては地元の方々が病院存続を強く願われた程の信 頼を得たことなど、この際の新鮮な感激は忘れ得な いことであります。

この際、学部設置準備委員長であった九大名誉教 授樋口謙太郎先生の下でこの少人数発令者達は教 授会を開くことになり、そして大学当局と接することと もなりました。それとともに学部・病院建設のための 教授会決定の責任の重大さを認識させられるとともに 大きな責任と苦労を感じることになりました。それを 打開するため、考えたすえ思いついた、新軌軸とも云 うべき、次年度早々、正規発令予定の全教職による 「予定者会議」を発足させることでありました。画期 的なことと思い、また期待もいたし、一致団結が出来 ると確信しました。

この新しい「予定者会議」は頻回に開催しました。 遠隔の地の方々も近隣の方々も皆、手弁当で熱心に 集まり、情報交換とお互いの意志決定を確認できて、 新しい出発のためによい理解と認識を得て、学部・病 院づくりの進捗につれて、全体としてよい成果を挙げ 得たと記憶しています。

医学部・病院建築落成直後にも印象深い事柄を想 い出します。それは暫定病院閉鎖に伴い、その入院 患者さんを七隈の新病院へ安全に遅滞なく移送しよ うということで、そのため県警の方々と度々相談を繰り かえし、緻密な計画を打ち立てました。この病院大 移動はテレビで刻々と報道する程全市を湧かし、福 岡大学医学部・病院の出発のよい祝砲ともなったと思 いました。

昭和48年8月4日付で病院開設の届け出がなさ れたと記憶しています。

3) その後も大学はこの重装備の第9師団に力を注 ぎ、意を込めて頂きました。とくに当時の今村 有学 長(後総長)の想いと決心、そして瓦林 潔理事長(当 時九電会長) の理解と決断は強く印象ぶかく私どもの 心に刻みこまれました。

また当時の九大医学部教授会からは側面的なご 協力を頂いたことをおききしており、忘れ得ません。

この折医学部・病院の現場の私どもも私立医科大 学協会との新しい接触のなかで、次第に「私学」を識 ることになり、それとともにこの新しい建・学部に際し 私どもの力を新しい学生諸君とともに出し切って見よ うと思い、そして従来からの国立大学・官学の思想や 衣裳をひきずらない、あくまでも新しい私立医科大学 らしい新たな意図をもった、この福岡大学の教育・研 究・臨床の"よき speciality,を打ち出したいと強く念 願したことを思い出します。

それはまた「東の慶應、西の福大」というキャッチ・ フレーズでありました。極めて明解で大発声をしたこ とは忘れられません。これは当時の西園昌久医学部 長の素晴らしい発想であり、ここで絆を強くしたことは 忘れ得ないところです。

4) 先般、一回生の諸君が中心となり、見事に同窓 会名簿を出されました。それと同時に高木会長の檄 文ともいえる一文がそえられていました。

これらを拝見しますと、この学園の成果が、その歴 史と絆のもとに見事に結実されたことを知らされまし た。そしてそこに見られる会員のすべての方々の医療 行動と研究業績の結実が世に、そして世界にしっかり 通じていることを見せて頂き深く感銘を受けました。

それでここにこの喜びを申しあげて敢えて初期の 頃のことを書き、この会誌に添えたいと思います。

追―既に旧い頃の事なので、記憶違いがあればお 許し頂きたいと思いますし、叱責、訂正をお願い申し ます。

3月23日

東北・関東大震災の悲しいテレビニュースをききつ つ。

同窓生交歓

第1回 卒業生の会(なっぱ会)発足について

福岡大学医学部第1回卒業生の会(なっぱ会)監事 野 崎 藤 子 (1回生)



今年は年初より日本列島寒さ厳しく、宮崎では新 燃岳の噴火もありなにかとざわざわした日々が続いて います。同窓生の皆様には、ご多忙の毎日をおすご しのことと思います。

さて、昨年2月27日に福岡市内の寿司店にて第1回卒業生の卒後初めての会を開催いたしました。 昨年、福岡で第1回卒業生の女性3名が集まる機会があり、第1回卒業生は1度も集まったことがないという話になり、皆様の賛同を得て卒業後、約30年を経て初めての会を行うことができました。

参加者数は32名で関西、四国、中国、九州など

各地からお集まりいただきました。3名の同窓生がすでに亡くなっており、黙とうしたのち旧交を温め楽しく終えることができました。今回、参加できなかった方々もファックス等で現在の近況を知らせていただきましたので、そのことも参加の皆様にご報告することができました。

昨年、3月9日には朔、高木、林、田口星、野崎の5名が集まり会の名前を1978年卒業につき7、8で「なっぱ会」と名づけることと決めました。毎年、2月の第2土曜日に開催することといたしました。

第2回の今年は2月12日にやはり福岡市内の中華料理店で行いました。北九州から中国地方にかけて大雪でやむなく参加できない方もおられましたが20名が集いました。皆様のご助言とご協力の下、楽しい会を開くことができており、これからも毎年集まろうと決意したしだいです。

来年は2月11日(土曜日)の予定で御座います。 皆様、お楽しみに。

烏帽子会で報告してほしいとの依頼が御座いましたので、簡単ではありますが「なっぱ会」の報告をさせていただきました。ありがとう御座いました。



会員寄稿

初心忘るべからず

白十字病院 院長 城 崎 洋 (2回生)



平成2年 4月1日に 福岡大学外 科学第一 (現消化器 外科)から 現在勤務中 の白十字病 院に赴任し て、はや満 20年が経 った。ここ 数年、母校

福岡大学からローテーションしてくる学生、研修医の 中に医学部時代の同級生や先輩、後輩の子弟を多く 見かけるように成った。信じたくないが、自分も今年、 還暦を迎える。外科医になりたてのころ、患者の60 才以上は高齢者なので術後合併症が多いから注意 するようにと教えられたことを昨日の事のように思い出 す。

今思えば、先輩外科医の教えを守り患者の喜ぶ顔 を見るために、過酷な業務を遂行したつもりだが、か なりの部分は自己満足であったであろうし、若い医師 たちに外科の事を 3K 職場と思わせ、外科離れを助 長しただけかもしれない。

ここ数年、院長として、ドクター秘書を導入し医師 の負担軽減に邁進するのも後輩医師たちに対する罪 の償いであろうか。

1979年4月に福岡大学医学部を卒業し医師にな って、最初の10年間は身につけることが多く、成長の 遅い自分に苛立ちながら、しかし生き方をゆっくり考 える暇も無かった。次の10年間くらいは後輩医師を 育成しながら、自分も成長しなければならず、多忙す ぎて、家庭を顧みず、家内が子供を連れて家出した のにも気付かない始末であった。今となってみれば 家庭人としてはそうとうな落第生であったと反省して

いる。

室町時代に「能」を確立した世阿弥の言葉に「ぜひ 初心忘るべからず、時々の初心忘るべからず、老後の 初心忘るべからず」という教えがある。最初の初心は 「若い時に失敗や苦労して身に付けた芸や思い」とい う意味らしいが、それ以降の初心は一つの芸の仕上 げ毎に経験を一旦御破算にし、そこから全てをくみ上 げなおす出発点という意味があるという。

最近、ある先輩が食事に誘ってくれた。「城崎、き ついやろう、あんまり頑張るなよ。」と先輩。「最近、医 療人として仕事が楽しいんですよ。やっと、自分の思 いが素直に表現できて、その結果が良い方向に行く ような気がして、やりがいがあります。」と小生。

大学の同窓生も医学部や地域の医師会の要職に 就いておられ、これからは、協力し一体となって地域 の医療に貢献したいという思いは強く、還暦を迎えた 今、ことさらに「時々の初心を忘れず」、今後一人の人 間として、医療人として如何に生きるべきかを考え行 動したいと思うこの頃である。

最後に、この原稿を書いている最中の3月11日に 東北関東大震災が発生、東日本の太平洋岸にマグ ニチュード9の地震と平野部でも10m以上の高さの 津波が同地域に押し寄せ、死者・行方不明者合わせ て3万人弱と推測される未曾有の天災が発生し、加 えて東京電力福島第一原子力発電所の被災による 放射能漏れが、今この時も、凍てつく大地に投げ出 された同地域の住民を震撼させている。

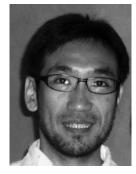
奇しくも、3月20日は福岡西方沖地震から満6年 の記念日である。この時は自身に大した被害は無か ったものの、東北関東地域には親族もおり、被災者に 対し、心より哀悼の意を表したい。

福岡大学形成外科・美容外科 大慈弥裕之教授 の御推挙により、取りとめのない文章を上梓すること をお許し頂きたい。

2011年3月23日

「ピラティス」、そして、在校生に一言

スポーツ・栄養クリニック 院長 武 田 淳 也 (16 回生)



皆さんは「Pilates:ピラティス=Contrology:コントロロジー」を御存じでしょうか?実はこの「ピラティス」は現在、世界的に医療分野での活用が広がってきており、医学部同窓会の諸先生方にも是非、知っておいて戴きたいものです。

その証拠に、私が専門とする整形外科分野で全米ランキング NO1.として知られる HSS (Hospital for Special Surgery) や一流病院クリーブランドクリニックなど、多くの医療機関においてリハビリテーション (以下リハビリ) やコンディショニングなどのアプローチ法として取り入れられています。

クリーブランドクリニック (http://my.clevelandclinic.org) から紹介されている「ピラティス」の効用には、1)バラ ンスとコーディネーションと循環の改善2)スポーツの パフォーマンスを改善3)身体が軸方向に伸長4)姿 勢から生じる問題や腰背部痛の改善 5) 体幹の強化 と安定性と周囲の可動性の向上 6) 障害の予防 7) 動 きの改善8)強さと柔軟性のバランスの向上9)身体 への気付きの向上 10)衝撃がなく関節に優しい 11)リ ハビリの患者さん (循環器リハビリ患者さん含む) から アスリートまで、フィットネスと能力のレベルに応じて 幅広く全ての方にカスタマイズできる 12) 免疫システ ムの強化、以上の12項目が掲げられており、同時に 「ウォーキングやサイクリング、スイミング等の通常の エアロビクス・プログラムの補完として最適であり、 特にそのストレス解消効果は長期にわたる心臓の健 康増進に寄与する」、というコメントも添えられていま す。さらにHSS(http://www.hss.edu/integrativecare.asp)では、「人工関節の方からアスリートにまで 活用できるコントロールに重点をおいた運動で、整形 外科術後、慢性疼痛(特に腰痛)、側彎症、骨粗鬆症 などに活用できる」と紹介しています。

国内では、40歳の現役テニスプレーヤーとして活躍中の伊達公子選手も「ピラティス」をしていることが知られています。

しかし、なぜか医療分野における「ピラティス」の活用を知る日本の医師は大変少ないのが現状で、上記

病院に留学経験のある先生でさえ御存知ない!(留学目的が主に研究や手術であることが多く、外来サービス部門まで見聞する機会はそう多くはないと推察されます。)

この1年程で「ピラティス」の医科学論文数は世界的に倍増したものの、まだ多いとは言えませんが、無作為比較試験 (RCT)による研究の率はヨガ、太極拳を凌いでいます。3大グローバルスタンダードの健康文化といわれるヨガ、太極拳、ピラティスの共通点は、有酸素運動、レジスタンストレーニング、ストレッチ、姿勢制御トレーニング、神経筋協調トレーニング、スロートレーニング、コーディネーション&スキルトレーニング、呼吸などの要素が、総合的に含まれていることです。加えて「ピラティス」ならではの特徴は「視覚イメージと身体感覚を統合し実際の動きとして出力できるようにするトレーニング」がシステムとして入っていることです。これがリハビリとスポーツ医学の現場で活用される一番の理由であろうと私は考えます。

ここで「ピラティス」と私の出会い、そして私自身に ついて少し述べたいと思います。私と「ピラティス」と の出会いは、1999年、アメリカにスポーツ医学研修 留学中、あのサンフランシスコジャイアンツのメディ カルサポートをしていることでも知られる St.Francis Memorial Hospital O Center for Sports Medicine を訪れた時のことです。 そこの Director でありカリフ ォルニア大学サンフランシスコ校医学部教授でもあ るDr.James G.Garrick 先生は、全米のメジャー大学 で一番最初にスポーツ医学科が創設されたことで知 られるワシントン大学の初代スポーツ医学科教授だっ た方であり、AJSM (American Journal of Sports Medicine) をはじめ幾つものスポーツ医学ジャーナル の Board も務められている方でした。その彼は同時 に、全米のダンス医学のパイオニアとしても知られ、 また、世界で一番最初に医療に「ピラティス」を取り入 れた医師としても有名な方だったのです。私は彼の 下で、日本ではそれまで見たことも聞いたこともなか った「ピラティス」の木で出来た専用器具と、その器 具を用いて行われていた「ピラティス」のリハビリとコ ンディショニングのエクササイズを見て、直ぐに「こ

れは使える!日本に是非取り入れたい」と思いました。 私は2005年の開業直前に、医療領域の「ピラティ ス」として最も世界的に知られる「ポールスターピラテ ィス®」(50 カ国 8 言語に広がっています)のマイアミ 本部にて、アジアで一人目の医療領域でのピラティ スの総合的な指導資格者として認定されました。そ してピラティスを取り入れた医療機関としてはアジア で2番目(1番目は台北市立病院)となる「スポーツ・ 栄養クリニック」を福岡市内、薬院に開業し、日常診 療はもちろんのこと、現在は日本ピラティス研究会会 長として、日本国内においてもグローバルスタンダー ドのピラティス指導者(ほとんどのピラティス教育団体 が参画している Pilates Method Alliance: ピラティ スの国際的な非営利組織、本部マイアミ= PMA は、 最低でも450時間以上マットとピラティス専用器具の 両方を学ぶ包括的= Comprehensive: コンプリヘン シブな指導者養成のためのプログラムを修了するこ と、としています。さらに資格取得後の5年間はビギ ナー指導者といわれ、学習・訓練の継続を推奨され ています。特にピラティス専用器具を用いる時は、そ の効果と安全面から上記に沿ったトレーニングを修了 することが不可欠です。) を育成する日々を過ごして います。私が代表を務める Pilates Lab (ピラティス ラボ)福岡と代官山には、現在、多くの理学療法士や 作業療法士がサブスペシャリティーとしてこの「ピラ ティス」のグローバルスタンダードの指導者資格を取 得するために全国から養成講習を受けに来ています。 彼らの一番のジレンマは、せっかく彼らが資格を取得 してもリハビリの処方箋を書く肝心の医師が「ピラティ ス」をほとんど知らないことです。そのようなことから、 私は今「ピラティス」の素晴らしさを知る医学部教授を はじめとする医師達の賛同の下に「認定ピラティス処 方医」という医師の資格制度を作る準備を進めていま す。同窓の先生方の中にも、もしご興味をお持ちの



方がおられましたら私に御一報下さい。私はこの「ピラティス」を「カラダ取説 (カラダの取扱説明書)」として、一人でも多くの方々が「私は正しい姿勢、身体の使い方、呼吸法を知っており、実際に自分でも出来ます!」と言えるようになり、「カラダ取説」を知らないで誤ってカラダを使ったことにより健康を害す人を減らし、さらには自分自身のカラダをより快適に使いこなすことで、より幸せな生活を送る人を増やすべく、人生の後半を活動して参る所存です。

在校生に一言:私は学生時代には徹底して遊び、 複数回の浪人・留年も経験した、大した研究業績も 持たない、優秀でも何でもない単なる一開業医です。 そのような私でも、ここ数年で全国学会・国際学会に おいてシンポジスト・パネリスト7回、学会認定教育研 修講演3回、教科書分担執筆2冊、著作1冊などの 活動の機会に恵まれるようになりました。全ては「夢・ 継続・極める・感謝」のお陰だと思っています。皆さん の将来に向けて何かしらの参考になれば幸いです。

参考文献: Return to Life Through Contrology(リターン・トゥー・ライフ・スルー・コントロロジー)~ピラティスで本来のあなたを取り戻す~著: ジョセフ・H・ピラティス、訳: 日本ピラティス研究会、翻訳監修・編著: 武田淳也、現代書林。

寄稿

福岡東医療センター脳神経外科(福岡医学部脳神経外科) 重 森 裕 (24 回生)

先日の烏帽子会の座談会に対して、若干の私見を お許しいただけるのであればと思い寄稿させていた だきました。

座談会の中で黒木医学部長が発言しておられるように、医学生の医者になるという「プロ意識」を我々が

育てていく事が極めて重要な点である事は、周知の 通りと思います。

しかし出石先生は、我々教育者は上記の事を理解 しているにも関わらず、福大医学生全体的には、医学 的知識のレベルが低下しているように思えてならない とおっしゃっております。

少なくとも座談会で答えが見つからなかった上記のことの中にどのような問題点が隠れているのでしょうか?つまり、知識レベルを低下させる問題点は、教育者にあるのか?それとも、学生にあるのか?

私には、上記の様な疑問が、座談会の中で議論されていたのではないかと推測しました。そして、その答えは、教育者および学生の両者にあるという結論に達したのではなかったのでしょうか。

両者に問題があると言うのは、私も以前からの同意 見です。むしろ学生時代には、教育者側に問題があ ると考えていました(2000年度 福岡大学同窓会総 会発表内容より)。

しかし、昨今の学生の知識レベルの低下について 指摘しているのは、医学部だけではないようです。

内田樹先生(神戸女子大教授)は、書籍「街場の教育論」の中で、全学部的に学生の教育(知識)レベルの低下が指摘されており、各分野の教職員が危惧しておられる事を記載されております。その書籍の中で、様々な問題点とその対応方法を分かりやすく指摘しております。

今回、紙面で指摘された問題点と、書籍で指摘されている点が酷似している気がいたしましたので、若干の私見を加えて示してみたいと思います。

私が在学中であったの学生時代(福岡大学 24 回生)と比較しても、低学年(大学 1・2 年生)の一般教養の授業が減っております。学生の一般教養のレベルを落とす事は、間接的に将来の医師の教養を落とす事につながると考えます。やはり、大学 1 年生、2年生の時に医師としてのやりがいを我々先輩が明確に示す事が大切になると思います。

特に大学での授業においては、医学概論の中で医師としてのやりがいを明確に学生に示す事が出来れば、変化が起きるのではないでしょうか?すくなくとも私は、大学1年生の時の医学概論の際に学んだ「医学は、サイエンスとアートである」という言葉を覚え、知識だけでなく医師としての感性を磨く必要があると考えました。

福岡大学の様に新設医学部が設立された時期に 比べて、今の学生方の入学時の偏差値は飛躍的に 伸びています。医師国家試験の試験結果と同様に、 福岡大学の学生が他の大学に比べて明らかに劣って いるとは思いません(もちろん医学知識が未熟な学生 はいますが、本来の能力とは別問題と思えるので す)。本来の能力に大きな差が無いのであれば、国 家試験の後に医者になるという意識を持っていない事 が、国家試験の合格率低下の一つの要因の可能性 ではないかと思います。

私は、実際の臨床を見る前に、医師がどのような仕事で、医師となるうえで何が必要であるかを学生自身が議論し認識し、想像してもらう事が重要であり、 医学生に医師としてのプロ意識を早期に植え付ける事が大切だと思います。

その為に、大学教職員は、大学5年生までの医学生に対して、国家試験の為に勉強をする事を教えるのではなく、患者さんにとってとても大切で必要だから、国家試験にも出題されるので、学生は覚えなくてはならないと言う事を指導する必要があります。

そして、やはり教授になれた様な優秀な先生方では、劣等感をもつ学生の指導は困難であるのではないか?などの議論も必要となるのではないでしょうか? (優秀なプレイヤーが、名監督ではない)

では、どうしたら良いのか?我々同窓会が出来る事を思いつくままに羅列しますと1:同窓の先生方や学生にとって身近な先生や先輩方からの指導(卒後15年未満程度の医師)が重要になると思います。

2:医学概論を若い先生方(科を問わず、熱血漢な医師)から授業をしてもらう。3:5年生や4年生から、1・2年生への授業(楽して進級していない事を示す)をする。基礎の授業であっても専門分野以外の医師が、各分野を15分ごとに4人で1時間程度の概論は学生に授業が出来るはずです。4:自分の興味がある専門分野だけでは、医師として不適切である事を明確に示す。6:留年した人に、何が足りなかったのかを自覚してもらう。などでしょうか?

大学外にも、母校の医学教育に興味を持ち、かつなんらかのサポートが出来るのではないかと思い私見を述べさせて頂いた次第です。

諸先輩方には、若輩者が訳も分からず理想論だけ述べていると思って寛容にみて頂ければ幸いです。

学生対策報告

白衣贈呈式

平 川 豊 文 (M5)

御礼の言葉

この度は私達5年生のために、このような心のこもった白衣を用意して頂き、誠に有難うございました。同窓会の皆様方には、5年生一同、心から御礼申し上げます。

私達はこれまでの4年間、教室の机の上で、医学というものを学んでまいりました。そして今回、白衣授与式で頂いた白衣に袖を通した瞬間、いよいよ待ちに待った臨床実習の現場に立たせて頂くということを、改めて実感いたしました。もちろん幾許かの不安はありますが、それと同時に、大きな喜びを感じております。

この臨床実習の意義を十分に理解し、実際の医療の現場に立ち、患者さん、医師、看護師をはじめとした多くの人々と接することで、医道についてより深く考え、まだまだ未熟な私達ではありますが、一人一人が、この福岡大学病院の一員としての自覚と責任を持って、真摯な態度でこれからの臨床実習に臨んでいきたいと思います。

与えられた時間は限られております。その中で、高い向上心を持ち、初心を忘れず、日々の努力と成長をここに誓い、御礼の言葉とさせていただきます。

平成23年 3月吉日 5年生総代 平川 豊文



新入生答辞

入学の辞

市 岡 正 敏 (M1)



ましい状況のなかにあります。こうして入学式を迎えている私たちも喜びと共に複雑な思いも禁じえません。そして、被災地の一刻も早い復旧を願うばかりです。

入学にあたり、ありがたいご祝辞や励ましの言葉をいただいた理事長先生、学長先生、さらに、ご来賓の方々、そして、今まで、私たちを温かい目で見守ってくれた家族や、支えて下さった皆様に、初めに感謝の気持ちを述べさせていただきます。

私たちは、日本有数の総合大学である福岡大学に 入学いたしました。多方面で活躍される諸先輩を輩 出してきた伝統が生きているこのキャンパスで、勉学 や諸活動に励むことができるものと、期待で胸を膨ら ませております。広いキャンパスで、先生たちを含め 様々な人達と積極的に交流を深めることで、より幅広 い知識、そして、人間性を、身につけていきたいと思 います。 日本経済は、大震災の影響もあり今後更に不安定な状況が続くかと思われます。大学に入ったからといって、その後、私たちが巣立っていく社会は安心などと呑気な事を言える時代ではありません。大学生活を始めるにあたり、困難な局面を克服し、さらに豊かな社会を築き支える一人となるために、的確な判断力や創造力を身につけた人間となれるよう努めていきます。

私たちは今まで、お正月に揚げる凧のように空を飛んでいました。自分では自力で飛んでいるように錯覚していても、地上で誰かに糸を引いてもらっているからこそ、飛ぶことができていました。家族や高校の先生など、周りで見守ってくれた人が、糸を引き、走ってくれていたのです。しかし、やがていずれは、一人で飛んでいかなければなりません。そして、自由に飛べるようになった時、飛べる範囲も広がり、今までみたこともない広大な空へ羽ばたく事もできます。もちろん、大きな雲に呑み込まれ目の前が見えなくなることもあるでしょうが、苦しい局面を切り抜ける力を身につけるために、この大学での生活を有効に活かそうと考えています。

最後に、私たち新一年生一同、日々の勉学を通じて、福岡大学の建学の精神である、思想堅実、穏健中正、質実剛健、積極進取を胸に、日本だけでなく世界の大空に羽ばたけるような人材になれるよう、充実した大学生活を送ることをここに誓います。

平成二十三年四月一日 新入生総代 市岡 正敏



キャンパス便り

《平成22年度鳥帽子会賞受章者名簿》

年 月 日	受 賞 者	受 賞 対 象
22. 6.25	ラグビー愛好会	平成 22 年度第 49 回九州山口医科学生体育大会 ラグビー部門準優勝
22. 6.25	バスケットボール愛好会	平成 22 年度第 49 回九州山口医科学生体育大会 バスケットボール部門優勝
22. 6.25	準硬式野球愛好会	平成 22 年度第 49 回九州山口医科学生体育大会 準硬式野球部門優勝
22. 6.25	ゴルフ愛好会	平成 22 年度第 49 回九州山口医科学生体育大会 ゴルフ女子部門準優勝
22. 6.25	サッカー愛好会	平成 22 年度第 49 回九州山口医科学生体育大会 サッカー部門優勝
22. 6.25	硬式庭球愛好会	平成 22 年度第 49 回九州山口医科学生体育大会 硬式庭球女子部門優勝
22. 6.25	竹 山 文 徳	平成 22 年度第 49 回九州山口医科学生体育大会 柔道部門中量級優勝
22. 6.25	松 本 徳 彦	平成 22 年度第 49 回九州山口医科学生体育大会 柔道部門軽量級 2 位
22. 6.25	水 泳 愛 好 会	平成 22 年度第 49 回九州山口医科学生体育大会 水泳女子部門 2 位
22. 6.25	フットサル愛好会	平成 22 年度第 49 回九州山口医科学生体育大会 フットサル部門優勝
22. 6.25	アーチェリー愛好会	平成 22 年度西日本医科学生アーチェリー競技大会男子部門優勝
22. 6.25	アーチェリー愛好会	平成 22 年度西日本医科学生アーチェリー競技大会女子部門優勝
22.10.15	柔道愛好会	第62回西日本医科学生総合体育大会 柔道部門団体4位
22.10.15	莖 田 美佳子 中 川 丞 子	第 62 回西日本医科学生総合体育大会 バトミントン部門女子個人戦ダブルス 3 位
22.10.15	児 玉 英 也	第25回全日本医科学生アーチェリー競技大会個人3位
22.10.15	水泳愛好会	第 62 回西日本医科学生総合体育大会 水泳部門個人メドレーリレー 4 位
22.10.15	高 岡 千 容	第62回西日本医科学生総合体育大会 水泳部門個人 2種目 2位
22.10.15	バレーボール愛好会	第62回西日本医科学生総合体育大会 バレーボール女子部門準優勝

西医体を終えて

福岡大学医学部柔道愛好会 粟 田 聖 也 (M4)



 は毎年柔道部の九山個人戦好成績の記事を烏帽子 会会報に載せていただいているのを拝見していました が、今回は団体戦の成績で会報に執筆させていただ けるということなので、部員一同非常に嬉しく思ってお ります。

今回の結果についてですが、やはり西医体に向けて追い込んだ練習の成果や、以前から積み重ねて

きた力が表れたものではないかと思っております。また、コーチの先生も熱心にご指導して下さり、顧問の 竹下先生もお忙しい仕事の合間を縫って練習に参加 して頂き部員達に喝を入れて下さったことで、追い込 んだ練習の中部員一同気が引き締まったのが思い出 されます。ご指導いただいた先生方に感謝したいと 思います。本当にありがとうございました。

みんなで勝ち取った西医体準優勝

福岡大学バレーボール愛好会女子主将 伊 藤 香 里 (M4)

私たちはたくさんの方々のご支援のおかげで福大女子バレー部史上初の西日本医科学生総合体育大会バレーボール部女子部門準優勝という結果をおさめることができました。

私がこの大会で一番印象に残ったのは準決勝の琉球大学との試合です。琉球大学は同じ年に行われた九州山口大会で対戦し負けてしまった因縁の相手であり、今度こそ絶対勝つという強い思いで試合にのぞみました。この時の部員みんなが一体となった雰囲気は本当にすごいものでした。試合に出ている人もそうでない人も全員が一緒に戦っているという気持ちで

いるようでした。そして、琉球大学に勝つことができた瞬間、私の中で何とも言えない今まで味わったことのない胸が熱くなるような気持ちがあふれでてきたのを覚えています。

この西医体準優勝という結果は、試合に出て頑張ってくれた部員、影でいろいろな仕事をしてくれた部員、誰一人かけていても勝ち取ることができなかったと思います。そして私たちを今まで支えて下さったOBOGのみなさまに本当に感謝しています。これからもこのようなすばらしい経験を生かして頑張っていきたいと思います。



計 報

正会員合屋和弘先生平成22年9月28日ご逝去(9回生)

特別会員 三 好 萬佐行 先生 平成22年10月6日 ご逝去(解剖学)

特別会員 高 岸 直 人 先生 平成22年10月10日 ご逝去(整形外科学)

特別会員 井 上 幹 夫先生 平成22年12月10日 ご逝去(健康管理学)

合屋和弘先生を偲んで

水巻共立病院 中村 直(9回生)

合屋先生とは、同じ小倉高校の出身であり、同じ福岡大学に入学し、そして入局も同じ教室(健康管理科、現在の第五内科)でした。

研修医当時の彼は遅くまで仕事をしており、話しかけると議論好きな彼は、話が止まらないぐらいの勢いで議論をしてくる毎日でした。またスポーツマンである彼はラグビーが大好きで活躍していました。北九州に戻り、開業後もラグビー熱は冷めていなかったようです。まさに文武両道に通じた人でした。

そんな彼はアトピー性皮膚炎をもち、彼曰く「自分は 北九州市内で一番 1 g Eが高い」と自慢気に話して いたのを思い出します。また、考え込み出すと額を手 で叩くのです。それも少し離れた所からでも聞こえる 程の音を立てて叩いているのです。あまりの事にどうし たのかと聞けば、「頭の中がかゆい」と答えるんです。 これには多少なりとも驚きました。また慢性下痢の患 者を担当した時の彼は、畜便検査をするように言わ れ、嫌な顔もみせずに、淡々と検査をしていました。と にかく真面目なんです。臨床検査も腹部超音波検査、 上部消化管内視鏡検査、下部消化管内視鏡検査等 何でもこなしていました。器用なんですね。病気に関 しては、常に真正面から向かい合いとことん追求する 姿勢をみせていました。

そんな彼が、自分の異変に気付き、自分で超音波 検査を行い、腹水の存在を発見して、病院を受診。詳 しい検査や治療を開始したのでした。いつかは復帰す ることを思い治療に専念しましたが、病気の勢いには 勝てず、大変若くしてこの世を去りました。大変残念で あります。その身体は本人の意志に従い病理解剖さ れたと聞いています。最期まで追求心の強い人でし た。今頃は、天国で先日亡くなられた井上教授や長谷 川先生、平山先生等と楽しく議論していることだと思 います。

福岡大学名誉教授 三好萬佐行先生へ

福岡大学医学部心臓・血管内科学 教授 朔 啓二郎 (1回生)

先生が私の父の病院にインターンとして来られたのは、私が幼稚園の頃だったと思います。その後、私の両親が先生方ご夫妻の結婚式の仲人を務めたこともあって、先生には子供の頃から、大変かわいがっていただきました。先生は九州大学から新潟大学に赴

任され、昭和47年福岡大学医学部解剖学主任教授として帰福されました。丁度その頃、私の家に新潟から電話をかけてこられ、その電話を私がとりました。「僕は福岡大学の教授に決まったけど、君はどうしてるの」との質問に、「僕は福岡大学医学部に入学が決

まりました」といったのを昨日のようにおぼえています。 当時の先生は、実験の猫を抱きながら、せまい実験 室で若い先生方と動き回り、ハツラツと研究をされて いた、そんなイメージが強烈でした。最年少で医学 部教授にご就任され、多くの賞を授賞されたのです から、あこがれと尊敬で先生をみていました。学部 長、副学長を歴任されましたが、私は福岡大学赴任 当時の先生が一番好きでした。なぜなら、私の研究 者としての原点が、その頃の先生にあったからです。

医学部卒業の時、医局の選択の時、留学の時、大学人となってからも、先生には、いつも様々な相談にのっていただきました。また、私が講師時代には、教授になる雰囲気を持つことを先生から厳しくご指導いただきました。先生が言われる雰囲気ですが、未だに理解や納得ができていませんが、私が第二内科の教授になれたのは、先生のご薫陶のおかげと思っています。

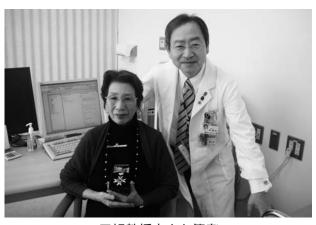
先生は16年前に心筋梗塞を発症されました。私が診るようになったのが、心不全を起こされてからこの4~5年だったと思いますが、何回か入退院をくりかえしておられました。主治医である私の意見はあまり聴かれませんでした。しかし、つい数日前、叙勲が

叙勲 正五位

決まられた時には、素直に入院していただきました。 皇居に行くため、体調を良くしたいと思われたのかも しれません。私に死亡確認をさせていただき、臨床 医として光栄に思っております。 奥様、宮崎から駆け つけられた野﨑藤子先生と病棟の医師達で先生を見 送らせていただきました。 その後、竹下教授、坂田 教授、岩崎教授のご執刀でご遺体を解剖させていた だきましたが、病理解剖は先生の強いご意志であっ たとのこと、医学教育に携わる立場から、最後にもう 一つ感謝申し上げます。

先生には色々なお立場があったのですが、原則を 曲げない先生の生き方が、私たち福岡大学医学部 卒業生のシンボル的存在であったのです。最後にも う一言、言わせてください。先生にはすばらしい家族 がありました。先生は奥様とご長女の眼科医になら れた多佳子先生とご長男の学君のことをいつも一番 に考えておられました。また、故郷、宮崎を最後まで 愛していたことは誰もが知っています。先生の人生 は最高だったと感じています。三好先生、安らかに 眠ってください。

平成 22 年 10 月 8 日



三好教授夫人と筆者

三好教授の思い出。そして私の解剖学教室入局の頃。

むらた整形外科クリニック院長 村 田 英 昭 (4回生)

私は昭和63年より4年間三好教授の主宰される解剖学第二教室にお世話になった。(所属は第一解剖という変則で)此の度多くの解剖学第二教室の先輩方を差し置いてこのような追悼の言葉を認(したた)め

させて戴きます事、誠に恐縮に存じます。何卒お許 しください。

平成22年(2010年)10月6日午前9時52分、 福岡大学医学部名誉教授三好萬佐行先生がお亡く なりになりました。学生時代そして短い間ではありま したが解剖学教室スタッフとしてお世話になった者と してここに哀悼の意を表します。

故三好教授(以下教授又は先生)は昭和34年九州大学医学部をご卒業になり森優教授の解剖学教室助手、講師を経て、昭和38年山元寅男教授の主宰される新潟大学医学部講師としてご転任。さらに助教授に昇進。昭和41年より米国ミネソタ大学へご留学され、帰国後藤田恒夫教授のもとで先生のライフワークであった走査電子顕微鏡による組織学の研究に邁進された。特に脾臓に関する御研究は世界的な業績をあげておられ、組織学の権威ある教科書(英文)に掲載されている。(小生も見せて戴いた。又、その御業績で風戸学術奨励賞を受賞しておられる。)

昭和47年40歳の若さで福岡大学医学部発足と 共に解剖学第二教室初代教授として赴任された。 (この時九州大学の同級生として、細菌学に天児教 授、精神科に村田助教授なども着任。)

教室発足より早速、第一解剖学教室の和佐野武雄 教授、田川隆輔教授、宮内亮介助教授(当時:後の解剖学第一教授)方と学生実習用解剖体の蒐集に奔 走され、二年後の学生解剖実習には見事十分な御 遺体を集められたとのことです。

教室では宮内亮介助教授と共に教育、研究に邁進され、教授御自身は走査電子顕微鏡では数々の業績を残しておられる。解剖学会におかれては第101回日本解剖学会総会(会頭)の成功により福岡大学解剖学教室の実力を他大学へお示しになられた。

研究においては教室のテーマである電子顕微鏡に よる組織の立体構造について多くの成果を残された。

開講後多くの研究生を擁し、医学研究 部門に多大な貢献をされた。同窓には 野崎藤子先生、外薗恵介先生を始め、 辻俊雄先生、安元義博先生その他多く の先生方が学位を授与された。

(助教授として教室を支えておられた宮内助教授は大分大学教授に、曽爾助教授は名古屋市立大学教授にご就任されました。)

又、九州大学より東京大学医学部教 授となっておられた山田英智博士を教 室に招聘され、さらなる組織学の教育、 研究の発展に尽力された。 教室が創成期を過ぎた後、昭和60年医学部研究科長を端緒に要職を歴任される。昭和62年12月より平成9年までの間3期医学部長を務められ我々医学部学生は大変お世話になった。さらに平成9年12月、医学部より初めて福岡大学副学長に任命され本学に対して医学部を強力にアピールするその先駆けとなられた。医学部長時代、まだ形成外科が整形外科の中で細々と外来をしていた時、形成外科講座の開講は大変困難であると仰りながらも、大慈彌裕之先生(現教授)の熱意に耳を傾けておられた。

開講後順調であった二つの解剖学教室も、私の在 局中解剖学第一の田川隆輔教授が急逝されるという 非常時が発生した。(原因はタクシー乗車中の突然 の腹部大動脈瘤張破裂。その数年前腰痛で精密検 査をされ 動脈瘤の存在を指摘されてはいたとの 事) あまりに突然の事で解剖学教室はもちろん、医学 部全体が大変混乱した。(私も所属は解剖第一であ りながら実質は解剖第二という事情があり)そこで教 授は解剖学の総責任者として第一、第二解剖学教室 を混乱無きよう指導され、両教室のスタッフを総動員 し医学生の解剖学教育に支障をきたさないよう冷静 に対処された。小生を含め西園正徳先生(飯塚市で ご開業。この時健康管理教室より第二解剖へ出向 中。)ら第二解剖(組織学)を担当していたスタッフも 急遽第一解剖(肉眼解剖)の学生教育を兼任した。 これは宮内亮介先生が第一解剖の教授としてご赴任 になるまで小川皓一准教授を中心に続いた。(故田 川隆輔教授は献体され、三好教授も同様に献体され たと聞く。最後まで医学部にご貢献された。)

さて、教授の御趣味と言えばゴルフと酒精であろうか。(私の知る限り)





まずはゴルフが挙げられる。40代でお始めになったといわれるゴルフは事の他熱心であり、教室に居らっしゃらない時はゴルフ場?と思われるくらい一時は熱中されたようだ。シングル?を目指しておられたとも聞いている。通常はメンバーであられたセブンミリオンの会員の方々とプレーされる事が多かったようだが時に我々医局員や医学部事務方ともラウンドされる事があった。プレー中はルール、マナーに厳しく同伴する時は緊張したものである。(ご自分のスコアによりややご機嫌斜めの時もあったようだが・・)

次にお酒が大変お好きであった。というよりはお酒が教授を離さなかった?ようだとか・・。 医局には常に 銘酒が置いてあり、夕方仕事が一段落した頃「飲もうか」と誘われご相伴したものだ。ところでそのあと 我々は当然車で帰る事になる。教授は免許を持っておられなかったので徒歩で通勤されていた。(又は 我々が送迎する) 飲酒運転が違法であることはご存知であり一応"大丈夫か"と気にされるものの同乗された。今ではとても出来ない事である。(当時は他の医局でも多少の飲酒運転は大目に見ていた。)

又、お酒に伴い 食通でもあった。福岡の有名料亭(三光園など)はもちろん、隠れた名店も良くご存じで、その1つ城南区友丘(友泉亭公園の近く)にある(あった?)『玉船』(大将が天皇陛下の料理人をした事がある?とかないとか)など馴染みにされていたようだ。実はこの店は私の方がたぶん教授より早い頃(20代前半)からの行きつけで、行くと女将からチーフと呼ばれる(理由については不問を。よって医師になってからは行き辛くなった。)さらに、医学部事務方とのお付き合いも盛んであった旨伺っている。特に医

学部長に就任されてから機会が多かったとのこと。ゴルフ、アルコールと色々お伴をされたようで大変気を遣われた(失礼!)であろうと推察する。私も教授、事務の方とご一緒して、ゴルフ、食事のコースに同席した事があるが、日頃の激務に対するストレスの発散であったと思われる。(私は他に趣味をお持ちであったかどうかは詳しくは存じません。)

雑談でアメリカに留学された時のお話 も時にされていた。私が覚えているのは アメリカへの機中でのウイスキーの注 文の仕方である。ゴチャゴチャ英語の作 文をせず 短く「ワーラーアンドウイスキ

ー。ダブル。」で通ると。(間違っていたらお許しくだ さい。)やはりアルコールについてのお話が多かったよ うに思う。

その他御趣味のお話以外、医学者である心構え、 さらに日常の言葉遣いについてさえもご教授いただい た。とかくありがちな尊敬語と丁寧語の誤用が多くみ られる事は大変見苦しいと仰っていた。それなりに気 をつけていた心算であったが身に沁みる思いであっ た。

他に印象に残っているのは京都の解剖学会でご一緒した時、平等院 (であったか) にお伴した。 社寺に ご関心が深いようで色々とその蘊蓄を披露された。

医学部長と教室教授の激務をこなされる姿は一見 頑強で御健康そうに見えたが、私の在局中胸痛を訴えられ、主治医であられた石原循環器内科院長(九大時代の同級生)の御紹介で小倉記念病院において心カテをされることとなった。当時机を並べていた柳瀬圭史先生(博多区でご開業中)がお詳しく、延吉正清部長(現院長)がされるので心配しないで良いとは伺っていたものの、無事検査が終了し復帰された時は教室員一同安堵した。(不謹慎であるが一部に違った人もいたとか?)後で聞いた話だが、実は検査前に万が一に備え教室の運営その他諸々について遺書を書いておられたらしい。やはり心臓の検査となると責任者である事より"ひょっとして"とお考えられたのか。宜なるかな・・。

ここで私事で恐縮ですが、私が解剖学教室にお世話になった経緯を述べさせていただきます。臨床医をされている先生方で、もし基礎に行く事を考えていらっしゃる先生方への参考になりましたら幸いです。

(但し時代が違うのであまり参考にならないかもしれませんが)

私は整形外科入局7年、関連病院に出張しながら (いわゆる"どさ回り")専門医を取得した後とある病院 の部長時代、その時医員として来ていた後輩より、大 学院を始め研究者についての相談を受けほとんど参 考となる意見を述べる事が出来なかった事に忸怩た る思いがあった。又専門医を取得したものの関連病 院の部長としての限界を感じ(まだまだ未熟でありな がら大学から遠く離れ専門性のある部位別臨床経験 を十分に診る機会がなかなかなく、又大学へ戻る当 てもなく)何らかの step up を望んでいた時、ある知人 医師の結婚式で偶然西園正徳先生と隣席になり、 色々話しているうちに三好教授の教室に来ないかとい う話となった次第。暫らく悩んだ末三好教授にご挨 拶に行くと快い返事を戴き、「高岸教授の許可があれ ば解剖学教室としては問題ない」と仰っていただい た。しかしあまりに急でありとても高岸教授(初代整 形外科主任教授) のお許しが得られないと思ったもの の、勇気を振り絞り直接(医局の他の者に相談すると 引き留められそうであったので) お願いに行くと、あに はからんや「今まで整形医局員として頑張ってきたか ら暫く三好先生のところでやってみろ」と快くお許しく ださった。出向していた関連病院には大変迷惑をか けることとなった。(結局その時の病院は一年で退職 した。急に部長交代になった松永英裕先生と医員で あった青野猛先生には大変ご迷惑をお掛けした。) こ うして解剖学教室に出向(助手:今の助教授)すること

恥ずかしい話、私は学生時代解剖学(組織学)の実習は出たものの、講義のほうは、ほとんど出ていない。(出ても寝ていた)当時は代筆が可能であり、佐賀県多久市でご開業の諸江一男先生(前福岡大学筑紫病院第二内科准教授。同期であり出席番号が前後。同じサッカー愛好会。すべての授業で代筆していただいた)には大変お世話になった。(実際は三好教授は出席をお取りにならなかったようだ。)

しかし、解剖学教室のスタッフなってから漸くまともにに講義を聞くこととなり、その簡潔明瞭な講義に感心し、もったいない事をしたものだとやや後悔した。解剖学教室への入局は博士号を取ることが目的でなかった為、暫くしてその気のない事をお話したら「基礎に来て博士号をとらない馬鹿はいない」と一括され結局取得することとなった。(現在開業して何らかの役

に立っているかと言うと特にないが、基礎より臨床を 見る機会を得た事、博士号を持つプライドのようなも のがあるのかもしれない)整形外科医であった為、テ ーマとして腱の走査電子顕微鏡的組織研究をテーマ に戴いた。今までは臨床のみしか知らなかった身とし ては、研究することの様々な不安があったものの、西 園先生に指導いただき、徐々に慣れていった。教授 は入局に際し臨床を経た者に対しては御配慮くださ り、週一回の外部病院への研修をお許しくださった。 (実は早朝の週二回の整形外科教室のカンファレン スにも出席していた)この事は大きなブランクを感ず ることなく臨床復帰する事が出来、大変感謝した。

土曜日など医局に最後まで残り(研究の合間に)ゴルフのテレビなどを見ていても決して叱責される事はなかった。本当に自由に研究をさせていただいた事は、やや臨床に疲れていた頃でもあり感謝しております。(自分で時間が作れた。)

実は、三好教授とは私の学生時代に個人的な関わりがあり(身内の事で大変お世話になったことがあり、その時も親身になり御助言を戴いた。)入局した時は何か御縁を感じた。

私の解剖学教室3年目には御母堂様がお亡くなりになった。故郷宮崎の高鍋のご実家で葬儀が執り行われた際、医局員総員参列し教授が時に話されていた幼少の頃牛の世話など大変であった事などその現実を垣間見る事が出来た。

さらにこの年は私にとって重大な人事があった。整 形外科教室の教授選挙である。結局、九大より緒方 公介先生(早くにご両親を亡くされ、宮崎の親戚のも とランプで生活する山奥で育ち、中学卒業後集団就 職で大阪へ。そこでカルチャーショックを受け一年 で宮崎に戻られる事となる。その後高校進学され九 大医学部に入学された)が第二代整形外科教室主任 教授に就任される事となった。長期米国留学の後帰 国され、将来九大教授と目されていた優秀な熱意あ ふれる臨床家であり研究者であった。私が三好教授 のもと研究している事をお知りになり、基礎研究はあく までも臨床に結び付く研究をしなくてはいけない。研 究の為の研究はするべきではないと強く仰っていたこ とが非常に印象に残っている。三好教授は緒方教授 には医学部長という立場と偶然郷里が同じ宮崎という 事もあり何かと相談相手になり、影の力になっておら れたようだ。私は4年解剖に在籍したのち整形外科 へ復帰した(追記:緒方教授は、無念にも平成10年

12月31日教授在任中に逝去された。享年51歳。福岡大学医学部はもちろん日本整形外科学会にとって痛恨の極みであった。)

教授はある時私に、「臨床医の資格が何かとれんものかな」と仰ったことがあった。基礎医学者として功成り名を遂げられた先生でありその上何を望まれるのかと思いましたが、一度、ご自分のある皮膚疾患を我流で治療され逆に悪化し、友人の皮膚科医師に診せすぐに治癒したとの事。ご自分が医師免許証保持者であるにも拘らず臨床での無力さを感じ臨床医への夢を持ち続けられたのかとも。結局、後年その意思を貫かれたようで御退任後、同門の甲斐保先生、野崎藤子先生(ともに解剖学教室の研究生)のもとで精神科認定医を目指して研鑽されたと伺った。この事は、私が臨床復帰後お世話になったタケシマ整形外科竹嶋康弘理事長(前日本医師会副会長。元福岡県、福岡市医師会長)の義兄であられる木村範孝博士(元九大小児外科助教授。三好教授と九大の同

級生)より教授のその熱意に同級生の間で話題になっている旨も伺っていた。結局その道半ばでの御他界はさぞ無念であられた事と推察する。

慮外ながら、私の記憶に誤りがなければ、高校時代は京都大学の農学部に進学を考えておられたとか。どうして九州大学の医学部に進学されたか伺ったようにも思うが残念ながら忘れてしまった。解剖学教室時代の様々な雑談でのお言葉を思い起こしながら、教授の御生涯がはたして御自身満足のいくものであったであろうか、そして確か神道であられた先生は帰幽の際どのように回想されたのであろうかと察する次第です。

最後に、教授御退任時の「上医は国を医す。医師は社会のリーダーたれ。自躾が大切である。」というお言葉を反芻しつつ、御両親のもとに旅立たれた教授に御別れをさせていただきます。

合掌。



恩師 高岸直人名誉教授 追悼記

福岡大学筑紫病院整形外科 教授 柴 田 陽 三 (4回生)

わたくし共の恩師であります高岸直人名誉教授は 平成22年10月10日15時25分に天命を全うされました。 謹んでご逝去を悼み、生前のお教えに対しあらためて御礼申し上げます。 先生は夏前から体 調を崩され、ご容態がすぐれないことをお伺いしておりました。9月の末にお目にかかりました際には、少し体調が良いとのことで、私たちの仕事のことまでお気遣い頂き、先生のご厚情には御礼の申し上げようもご

ざいません。

先生は昭和47年4月に福岡大学医学部整形外科学教室の初代教授に就任され、様々な苦労をなされ教室の基礎を作られました。福岡大学医学部の同窓生や整形外科学教室のみなさんは福大医学部創設期の頃をご存じないとおもいますので、ここに先生のご功績を紹介させて頂き追悼の辞とさせて頂きます。

高岸先生は七隈の地に整形外科学教室を開設さ れた後、その2年後の昭和49年(1974年)に世界で はじめて肩関節外科だけに関する学会を設立され、 日本の肩関節外科のパイオニアとして、その研究と 臨床の発展に指導力を発揮なされました。その日本 の発足に遅れること8年後にアメリカ肩肘学会 (American Shoulder and Elbow Surgery) が 設 立されております。また先生は昭和62年(1986 年)には第3回国際肩関節学会(3rd International Conference of Shoulder Surgery) を日本人として 初めて福岡で開催されました。世界中の肩関節外 科医が福岡に集い、活発な議論を交わしました。英 語の論文や教書の世界でしか名前を知らなかった高 名な海外の医学者を間近に拝見し、身が打ち震える 思いを致しました。教室からはわたし一人だけでした が、本学会に肩関節の動態関節内圧の演題を発表 させて頂く栄誉に預かりました。学会に参加したヨー ロッパの医師たちは、高岸直人先生が作られた日本 肩関節学会の発展をみて、ヨーロッパにも肩関節に 関する専門の学会が必要だとの認識を持ちました。 ヨーロッパ肩肘学会(SECEC)のホームページの "History"を見てみますと On the occasion of the International Shoulder Society Meeting at

Fukuoka/Japan in 1986, the French and Swiss orthopaedic surgeons Didier Patte and Norbert Gschwend decided that there was a need for European Society of Shoulder and Elbow Surgery. と記載されており、高岸名誉教授が開催さ れた学会に刺激されて、翌年の1987年に第1回の Société Europé enne pour la Chirurgie de I' Épaule et du Coude (SECEC) が開催されていま す。また先生のご尽力により第3回国際肩関節学会 の開催余剰金を基金として、翌昭和63年(1988年) に「高岸直人賞」が設立されました。 毎年、 開催され る日本肩関節学会の発表論文の中で、優れた研究 を行った若手研究者を顕彰するもので、これまでに 30 名を越える受賞者がいらっしゃいます。本学会受 賞者は、その後、日本の肩関節外科の指導的立場を 果たすようになっており、国内の肩関節外科医にとっ て大変名誉な登竜門となっております。また同年、 先生は医学界だけでなく、スポーツ界、コメディカル 界に声をかけられ九州山口スポーツ医科学会を設立 なさいました。本学会はスポーツ科学部の研究者や 理学療法師が医師と同じ条件でスポーツ医学に関す る研究発表・討論を行う事が出来る大変ユニークな 学会です。現在でこそ、医師のみでは医療が成り立 たないことは自明の事であり、集学的治療の必要性・ 重要性が認識されていますが、先生は今から20年 以上前にその重要性を認識、また実践なされ、その 先見性やリーダーシップにただ畏敬の念を覚えます。 平成3年(1991年)3月のご退任までに、15の学術 集会を開催なさいました。平成7年(1995年)には、 ヘルシンキの Martti Vastamäki 会長のもとで、第 6回国際肩関節学会が開催され、その中で高岸名

誉教授のご功績が称えられ、3名の世界の肩関節外科医のパイオニアのお一人として表彰がなされております。さらに平成13年(2001年)、第8回の国際肩関節学会が南アフリカのケープタウンで開催され、「世界の肩のパイオニア」のセッションで高岸先生が紹介されております。

先生は、学生時代よりご自身がスポーツをされる事をこよなく愛しておられ、サッカー、体操、テニス、野球と名選手として多彩な才能を発揮しておられました。こうした素養が九州山口スポ

ーツ医科学会の設立へ意欲的に取り組まれた下地となったものと拝察しております。 私はこうした先生より 直接ご指導頂いた弟子としまして大変光栄に存じます。

末永く、厳しくも優しい先生のご指導を頂戴したかったのですが、それもかなわぬ事となってしまいました。しかし、先生のまかれた肩関節外科学の種は一

層の進歩を遂げつつあります。私たちは先生の肩関 節外科学に対する教えを引き継ぎ後輩医師に伝えて まいりたいと存じます。

これまでのお導きに感謝しますとともに、安らかに 眠られることをお祈り申し上げます。本当にありがと うございました。

合掌

恩師 井上幹夫教授を偲んで

福岡大学医学部五健会会長(山元記念病院 内科) 小 川 健 一 (7回生)



12月に入り、体調をお崩しになられたと伺い、少しでもお召し上がりになられればとお口汚しのお品をお送りしておりましたところ、御丁寧にその御礼にと病床から携帯電話にお電話を戴きました。

そのわずか 2 日後、平成 22 年 12 月 10 日、訃報 は突然届きました。

葬儀が終わり、伊万里のマンションにもどりましたら、「主人は元気にしております」と奥様から戴いた8日付のお葉書がポストにありました。僅か2日です。無常を思い知らされました。

昭和59年に福岡大学医学部健康管理学教室(現神経内科)に入局し、以来優しくも厳しい指導を賜りましたことをまずは厚く御礼申し上げたいと存じます。

当時、井上先生は厚生省の炎症性腸疾患の班長をしておられ、教室員の殆どは消化管の勉強を一度はしていたように思います。夜遅くまで、透視所見と内視鏡所見との付け合わせを先輩方が検討しておられたのを研修医の私は遠巻きから見ておりました。

多くの先生は入局と同時に内科学会、人間ドック学会、消化器病学会、内視鏡学会に入会しておられたようですが、私は消化器系の学会には入らず、高血圧学会や肥満学会などに入って勉強させて戴きました。

学会発表ともなると、本番さながらに討論を重ね、 妥協を許さないといった姿勢で私たちをご指導下さいました。

教室は消化器系中心とはいえ、健康管理学というこれまでになかった学問を具現化するため内科的な視点で、患者様時に受診者様を全人的に診療しようと私ども教室員にも一つのことに囚われずに患者様を拝見するように指導して戴きました。昭和62年に大学院に進んだ私に、消化器以外の研究範囲で学位を取得させて戴きましたが、連日夜遅くまでお付き合い戴きましたことがつい昨日のように思い出されます。

医局旅行では教室員の部屋においでになり、若い 人たちの輪にお入りになられ、深夜まで語り明かして





おいででした。医局旅行は観光組、釣り組、ゴルフ 組に分かれるのが常でしたが、井上先生はゴルフが お好きで、教室のコンペではのびやかにプレイしてお られたようです。

プライベートでは結婚の折、お仲人をお願いするた めに家内と御挨拶に伺いましたが、腕を組まれてちょ っと横向きで殆どお話になられず、頷いておられたの が印象的でした。

新年会と称して先生のお宅に教室員がお邪魔した こともございましたね。

おそくまでお邪魔して、駐車禁止の切符を切られ た先生もおられましたね。

定年間近になられて、教室内で同門会を作る機運 が高まり、旧第五内科の先生方もご一緒に福岡大学



医学部五健会を開催することになりました。

直ぐに後任教授が決まらず、不安定な教 室運営の日々が続きましたがその間も私たち を案じて下さり、折に触れてお声をかけて戴 きました。御退任なさってからも博愛会病院 に御勤務の傍ら、九州電力本店中央健康管 理医をなさりながら、学会へも熱心に参加し ておられました。そのころ私も九州電力で御 一緒させて戴き、大企業の大集団を対象と した健康管理の在り方について御指導賜り、 最近の検診業務の中で大変参考にさせて戴 いております。昨年の秋の同門会にも御臨 席賜り、益々お元気そうにしておいででした

のに、もうお姿を拝見することもできないかと思うと寂 しくてなりません。葬儀場では、先生がお若いころに お記しになられた膵臓のβ細胞に関する研究ノートが 展示してありましたが、英語でびっしりお書きになっ ておられました。普段、お使いになる医学用語はドイ ツ語でしたし、消化管以外の研究をなさっておられた ころにちょっと驚きました。

最近は急性期医療機関に在籍し、日々の診療に追 われて研究もおろそかになっておりましたが、また抗 加齢という新たな分野に挑戦してみようと意欲が湧い て参りました。これも井上先生のおかげです。

もう直接御前で発表させて戴くことも、御意見を伺 うことも出来ないのは残念ですが、これからも

井上教授門下生の一人として、また地域医療に従 事する一医療人として、患者様本位の医療を行いな がら、臨床研究を忘れずに精進して参りたいと存じま す。何卒天国から暖かくお見守り下さい。

名残は尽きませんが、お別れです。 御冥福を心からお祈り申し上げます。(合掌)



研究奨励賞 募集要項

対 象:正会員及び準会員で、40 才未満の者または学部卒業後 10 年未満の者(本会会費完納を条件とする)

研究課題:医学に関するものであれば自由(医学に関する研究論文又は研究計画)

申請方法:所定の申請書による(所定欄に支部長推薦を要す)

提出先:〒814-0180 福岡市城南区七隈 7-45-1 福岡大学医学部同窓会事務局

Tel 092-865-6353 (直通) 代表 092-801-1011 内線 3032 Fax 092-865-9484

締 切:平成24年4月30日

賞状・賞金: 奨励賞(優秀論文賞を含む)5件以内 発表及び表彰: 平成24年7月、第31回同窓会総会席上

そ の 他:①論文受賞者は抄録を提出する事

計画受賞者は1年後研究成果報告書を提出する事

- ②申請書は同窓会ホームページからダウンロードするか、同窓会事務局に請求の事
- ③申請書はワープロで記載し、過去の研究業績(原著、著書、症例報告、学会発表)、研究の独創性・ 重要性を十分に書く事

※準会員の方もご応募下さい。

福岡大学医学部同窓会

在外研究援助金 募集要項

対 象:正会員、準会員及び学生会員(本会会費完納を条件とする)で医学の研究または医療技術の習得

のため、3ヶ月以上外国に留学する者

申請方法:所定の申請書により留学出発3ヶ月前までに提出の事

提出先:〒814-0180 福岡市城南区七隈 7-45-1 福岡大学医学部同窓会事務局

TEL 092-865-6353 (直通) 代表 092-801-1011 内線 3032

 ${\rm FAX}\,092\text{-}865\text{-}9484$

援助 金:1件20万円を限度とし、年間10件以内

発 表:その都度、同窓会会報に掲載

その他:①受給者は帰国後その成果を総会で口演するか同窓会会報に発表する事

②申請書は同窓会事務局に請求又は烏帽子会ホームページからダウンロードの事

※準会員・学生会員の方もご応募下さい。

医局長・医長名簿

(○内の数字は卒業回)

平成 23 年 4 月現在

	医 局 長	病棟医長	外来医長
[福 大 病 院]	区内区	州休区区	77 木 区 区
腫瘍·血液·感染症内科	田中俊裕⑰	石 津 昌 直②	石 塚 賢 治
内分泌·糖尿病内科		竹之下 博 正‰	野見山紫
消 化 器 内 科		国 禎 隆20 B B B Z	山 口 真三志⑱
呼吸器内科		廣田貴子	白 石 素 公印
腎臓・膠原病内科		安部泰弘②	伊藤建二⑤
神経内科・健康管理科	馬場康彦20	津川潤	樋 口 正 晃 (神経)
"			宗 清 正 紀 (健管)
精 神 神 経 科	内 田 直 樹	田 中 謙太郎⑤	永 井 宏②
〃 (ディケア)			吉 田 公 輔
小 児 科		吉村和子②	井手口 博⑲
消 化 器 外 科		星 野 誠一郎	吉 田 陽一郎
呼吸器·乳腺内分泌·小児外科		平塚昌文⑬	柳澤純
整 形 外 科		毛利正玄⑯	石 河 利 之18
形 成 外 科		酒 井 邦 夫	大 山 拓 人®
脳 神 経 外 科		安部 洋20	東 登志夫
心臓血管外科		伊藤信久	峰 松 紀 年
皮膚科		古賀文二②	中 浦 淳26
泌 尿 器 科		中村信之⑩	宮島茂郎22
産 婦 人 科		大 竹 良 子②(産科)	中山直美25
//	1 1× / 1010	植 田 多恵子 (婦人科)	野元論
眼科	梅田尚靖⑱	小 沢 昌 彦⑮	有 田 直 子⑮
耳鼻咽喉科		福崎勉忽	大西克樹窓
放射線科		浦川博史⑮	野元諭
麻醉科		平 田 和 彦⑫	平田和彦⑫
歯 科 口 腔 外 科		大谷泰志	梅本艾二
		八分分公心	一
			\rightarrow \frac{1}{2} \frac
輸血部		. I. NIII	鍋島茂樹⑬
救命救急センター		田中潤一	
総合周産期母子医療センター		中村公紀6	AT de He He C
総合診療部		明 石 徹	鍋島茂樹⑬
東洋医学診療部	久保田 正 樹⑭		
[筑 紫 病 院]			
筑紫病院 (総医局長)	吉 兼 由佳子⑲		
循 環 器 内 科		久保田 和 充⑲	北島 研②
内分泌・糖尿病内科		工 藤 忠 睦②	小 寺 武 彦
呼 吸 器 内 科		田中 誠②	赤 木 隆 紀②
消 化 器 内 科		久 部 高 司⑰	野 間 栄次郎®
小 児 科		橋 本 淳 一19	鶴 澤 礼 実
外		永 川 祐 二⑲	石 橋 由紀子②
整 形 外 科		篠 田 毅②	城島 宏⑭
脳 神 経 外 科		相川博	相川博
泌 尿 器 科		平 浩 志⑮	石 井 龍⑤
眼科		佐伯有祐	佐々由季生
耳鼻いんこう科		山野貴史®	松井郁御
放射線科		7, 7, 7, 7, 7, 7, 7, 7, 7, 7, 7, 7, 7, 7	
麻酔科			
病理部			
救 急 部			
32 10 田	九		

教育職員人事 (講師以上)

(○内の数字は福大医学部卒業回) [平成 22.10.2 ~ 23.4.1]

区分	所 属	資 格	氏 名	発令日	摘 要
退職	総合医学研究センター	教 授	岡 崎 正 敏	23.3.31	定年退職
	総合医学研究センター	教 授	影 浦 光 義	23.3.31	定年退職
	総合医学研究センター	教 授	桂 木 猛	23.3.31	定年退職
	輸 血 部	准 教 授	井手口 裕	23.3.31	定年退職
	神経内科・健康管理科	講 師	川 浪 祥 子	23.3.31	定年退職
	産 科 婦 人 科 学	准 教 授	江 本 精	23.3.31	
	消 化 器 外 科 学	准 教 授	田 中 伸之介⑤	23.3.31	
	脳 神 経 外 科 学	准 教 授	継 仁8	23.3.31	
	心臓血管外科学	准 教 授	森 重 徳 継⑥	23.3.31	
	筑 紫 循 環 器 内 科	准 教 授	山之内 良 雄⑦	23.3.31	
	心 臓 血 管 外 科	講 師	竹 内 一 馬⑳	23.3.31	
	筑 紫 外 科	講 師	酒 井 憲 見⑧	23.3.31	
	筑 紫 循 環 器 内 科	講 師	三 好 恵⑮	23.3.31	
休 職	消 化 器 内 科	講 師	阿 南 章18	23.4.1	
採用	心臓血管外科学	准 教 授	和 田 秀 一⑬	23.4.1	
	脳 神 経 外 科	講 師		23.4.1	
	総合周産期母子医療センター	診療教授	増 本 幸 二	23.4.1	
	形 成 外 科 学	准 教 授	高 木 誠 司	23.4.1	
	細 胞 生 物 学	准 教 授		23.4.1	
	生 理 学	准 教 授	森 誠 之	23.4.1	
	小 児 科 学	准 教 授	安 元 佐 和⑦	23.4.1	
昇 格	消化器外科学	准 教 授		23.4.1	
	内分泌・糖尿病内科	准教授		23.4.1	
		准 教 授	_	23.4.1	
	筑 紫 放 射 線 科	准教授		23.4.1	
	薬 理 学	講 師		23.4.1	
	循 環 器 内 科	講師	_	23.4.1	
	心臓血管外科	講 師	西 見 優	23.4.1	
	呼吸器·乳腺内分泌·小児外科学	講 師	平塚昌文⑬	23.4.1	
	整 形 外 科	講師	吉村一朗⑰	23.4.1	
	筑 紫 消 化 器 内 科	講師	久 部 高 司⑰	23.4.1	

事務局からのご連絡

事務局からのお知らせとお願い

今回の会報は記念号(50号)だと考えていましたら、同じく来年発行の同窓会会員名簿(10号) も記念号でした。ただそれだけの事なんですが、会員名簿となるとやはり少なからず緊張を感じま す。今回も前回の「誓い」の姿勢を踏襲させて戴きたいと思います。

調査用紙の発送は本年5月を予定しています。記載事項の細部はその時説明をつけます。ご協力 の程お願いします。

福岡大学医学部同窓会(烏帽子会)事務局

命の大切さを考える パート3



主催:福岡大学エクステンションセンター、福岡大学医学部、福岡大学病院、 福岡大学医学部同窓会烏帽子会、福岡大学病院ハートセンター、NPO法人臨床応用科学

編集後記

2011年春号の烏帽子会会報をお届けします。

本号は第50号の記念となります。1978年3月に第一期生が卒業して以来、33年間、医学部同窓生の活動を中心に母校である福岡大学医学部・病院の最新情報を皆様にお知らせしてきました。同窓生がさまざまな分野で活躍し、医療者として少なからず地域社会に貢献している姿をお伝えすることができることを、たいへんうれしく思います。

医学部・病院開設当時はたいへんなご苦労があったと伺っています。今回は草創期にご尽力いただいた名誉教授の先生方に、近況を報告していただきました。記事を拝見したところ、皆様お元気でご活躍なさっており、私たちも元気と希望をいただきました。一方で、残念ながら昨年秋から今春にかけて三好萬佐行先生、高岸直人先生、井上幹夫先生の三人の名誉教授がお亡くなりになりました。お三人ともに小生(三期生)の恩師であり、卒業後も医学部長、主任教授、医学部愛好会部長としてたいへんお世話になりました。これまでのお導きに感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。

前後しましたが、若くしてお亡くなりになった同窓生の合屋和弘先生にこころより哀悼の意を表します。安らかにお眠り下さい。

医学部・病院と同窓会が一体となって福岡大学がさらに大きく発展ができるよう、烏帽子会会報は今後も内容の充実に努めてゆく所存です。これからも皆様のご支援とご協力をよろしくお願い申し上げます。

大慈弥 裕 之(広報担当理事)

烏帽子会会報第50号

発行日 平成23年5月16日 発行人 高木 忠博 編集人 大慈弥裕之

発行所 〒814-0180 福岡市城南区七隈7-45-1 福岡大学医学部同窓会 電話 092-865-6353 (直通) 092-801-1011 (代表) 内線 3032

FAX 092-865-9484

E-mail:eboshi@minf.med.fukuoka-u.ac.jp

印刷所 口

ロータリー印刷㈱ 福岡市中央区長浜2-1-30 電話 092-711-7741 FAX 092-711-7901